転生した俺の成り上がりストーリー

四方季真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生した俺の成り上がりストーリー

【Ｎコード】

Ｎ１６８７Ｗ

【作者名】

四方季真

【あらすじ】

自殺したと思ったらなぜか赤ちゃんに。どうやら俺は転生したらしい。

魔法？あるの！？魔物？居るの……？興奮と恐怖と出会いと別れと成長と。転生した少年、リフエルの波乱万丈の物語。チート成長力を持った主人公です。２章からメインの学園に入ります。ＰＣから投稿してますがケータイでも出来る限り見易いようにしてます。

１－１：異世界に転生！？（前書き）

どうも四方季真（しかたきしん）です。これが処女作です。稚拙な文章力ですが、よろしくお願いします

※２０１１／０８／３１　サブタイの【：】を変更

1－1：異世界に転生！？

ゲーム。

それは人を魅了するもの。

人に希望を与え、人に絶望を与える。

希望とは夢や心を豊かにすること。絶望とは時間が途轍もなく早く過ぎてしまうこと。

俺はそんなゲームというものに魅了された人の一人だ。

ゲームは嫌な事を忘れさせてくれる。

ゲームは虚無に過ごしていた俺に生きる希望を与えてくれた。

……つまるところ、ニートなわけだが。

学校には行かず、高校は一応お情けで卒業できたものの、大学なぞいける筈もなく。

その後は部屋に籠ってゲームやアニメを見たりして。

……で、だ。こんな冷静に自己分析している理由は。

「あら、驚いた顔しちゃって。可愛いわねー」

……何故か、銀髪の女性に抱かれていました、しかもかなり美人。

夢、であれば良いが、いや、こんな女性に抱かれているなら夢のままでいたいものである。

……現実逃避はやめにしようか。現状、自分の様子は見れないが、このような女性に軽々しく抱かれている、という点から見て、赤ちゃんなのだろう。そしてこんな鮮やかな銀色の髪などみたことがない。日本で偶に染めてる人を見るが、所詮はたかが偽物の色、汚いという印象しかなかった。が、こんな鮮やかさならば、本物だと思わざるを得ない。

異世界――――――――そのような単語が頭に浮かぶ。しかし赤ちゃんから始まるのならば、転生、か？

転生という可能性が思い浮かんだ理由はある。俺は死んだのだ。詳しく言うなら多分、自殺。夜中、両親に見つからないようにリビングからジュースを取ろうとした時、寝室から話し声が聞こえた。耳を傾けると、母のすすり泣く声が聞こえる。

『今日、カウンセラーの人に息子のことを話してみたの』

どうやら、母はカウンセラーの所に行っていたようだ。

『あのどうやらあの子は自分の内に全て抱え込んでたみたい……。先生は、私に「情緒不安定だったり、暴力を振るいませんでしたか？」って。あの子はそんなことしなかったわ、一度も。だから先生はそう結論づけたみたい……』

確かに、誰に当るでもなく、物に当るでもなく、自己嫌悪に陥っていた。虐められる自分が悪いんだ、頑張れない自分が悪いんだって。

『あの子、一度だけ私たちに助けを呼んだわ、相談があるって。いつも内気でそんなことをしなかったあの子が……多分あれがあの子なりのヘルプだったのよ……でも私たちは気づいてあげられなかった……仕事が忙しいからって。あの子はその時、「そうだね、ごめん」って、笑いながら言ったわ。違かったのよ！本当に謝らなきゃいけなかったのは私たちで、あの子はなにも悪くはないのに……』

まるで子供のように泣く母さんを、父さんは優しく抱きしめていた。俺はそれを聞いたとき、全てがどうでも良くなった。母さんは悪くない。解決できない、輪に入れない自分が悪い。相当ネガティブになっていた俺は、いつの間にか部屋で、全てのゲームやＤＶＤなどを整理していた。

翌日、両親が仕事に出かけたのを見計らって、ショップに出かけた。

そしてまた気づいた時には、部屋で万札２０枚を握りしめてした。

そして俺は一枚の紙にこう書いた。

「ごめんなさい」って。

それだけ書いた時、持っていたシャーペンは全て壊れ、床に残骸が投げ捨てられていた。ズボンやシャツは涙や鼻水でびしょびしょ。自分でなんでこんな状況になったかわからなかった。涙がでる理由がわからなかった。

紙の隣に２０万を置いて、俺は家を出た。背負うリュックに、一本のロープを入れて。

そこからが思い出せない。記憶はその時点からこの女性の抱かれている部分につながっている。いや、正確には繋がってはいないのだが……。

ただこうして記憶を掘り出すこともでき、尚且つ冷静になれるのは、精神的に丈夫になってるからなのだろうか。

そして俺は俺を愛おしそうに抱く女性をみて、今度こそ、両親は大事にしようと決意したのだった。

１－１：異世界に転生！？（後書き）

２０１１／８／２８：サブタイトル修正

１―２：六歳になりました（前書き）

唐突に六年後です。貯めてたやつを連日投稿

お気に入り登録：５件

なん……だと……？まだ１０００文字なのに……ビクンビクン

ありがとうございます。ご期待に沿えるよう頑張ります

※２０１１／０８／３１　サブタイの【：】を変更

1―2：六歳になりました

六年後……。

俺は六歳のくせに、この世界についての書籍を読み漁っていた。というか、いくら寝ようがなにしようがこの世界からは脱出出来なかった。だから早々に諦めた。つか向こうの世界に未練なんて……いやあるにはあるが自殺準備をした手前、おめおめを生き返るわけにはいかない。

だから昔を振り返ることを止め、今を生きることにした。この世界であれば人間関係は白紙からであり、もしかしたら良好な人間関係を築けるかもしれない。それに俺に夢を与えてくれた、所謂剣と魔法の世界だ。知識を得ずにはいられない。

幸いというか、天才というか。俺には瞬間記憶能力があるらしい。父親の書籍をパラ読みしただけなのに、一字一句覚えていたからだ。しかし、言われたことに関してはあまり記憶にない。つまりそれは文章のみに限る瞬間記憶能力、なのだろう。それはそれでありがたい場合もある。いち早く忘れたいトラウマなども忘れられないのは正直きついだろう。

んで。確かに良好な人間関係を築ける、とは言ったが、内向的な性格なのはさすがに治せないので、外で元気よく遊ぶことはせず、部屋静かに読書している。だってこの世界は非常に魅力的なことにあふれているし、それにいくら体は子供っていっても頭脳は大人だし、子供たちと一緒に走り回るのは、気が進まない。

というわけで町の子供たちからは変人扱い。どう考えてもボッチフ

ラグです、本当にありがとうございました。

……いいさ別に。

……俺の住む町、エーデルは鉱山の麓に作られた町だ。規模はそれほど大きくはないが、鍛冶業が盛んで、注文が絶えない。どうやら外の世界では戦争が起こっているらしい。生活が裕福になるのはありがたいが、戦争のおかげ、というのが素直に喜べない。

最も、魔物という存在があるので、武具、兵器の需要が尽きることはないだろう、減りはするが。

うちの家庭は鍛冶業ではない。父親が剣術の先生をしていて、子供から大人まで、幅広く習いに来る。勿論自衛のためだ。どの場に居ようと、魔物から襲われる可能性は０にはならない。危険度が下がるだけだ。

そして母親が元魔法使い……この世界では魔導師と呼ばれる職業だったらしい。だから父親の部屋には剣術の本から魔法の本まで幅広い種類の書籍がおいてある。俺にとっては宝の山だ。まさかゲームばっかやっていた俺がここまで本の虫になるとは神様でも想像できまい。

この世界に名前はついていない。誰のものでもないからな。国はいくつもあって、小国を合わせれば数え切れず、書籍にも載っていない国もあるみたいだ。因みに亜人というのも存在している。人だけではないのだ。猫耳娘やエルフといった種族がある、オヤクソクというやつだ。

このエーデルが所属しているのはグレアリーズ国。鉱山が多く、鍛

冶業が盛ん。無論、兵器開発なども、最も盛んな国だ。他国からは非常に脅威だが、兵器や武具の流通を盾に不可侵条約を結んだ国も多い。なにより母がいうには、統治者が良い、とのことだった。この両親、この国からいって、俺は非常に恵まれた環境に産まれてきたようだ。

因みに文明レベルはわからん。まあ、テレビもねぇ、クーラーもねぇ、おまけに車も電話もねぇ！とくれば大体わかると思う。

次は魔法か。

魔法は誰でも扱える。が、使える強さ、威力は人による。ライターの火程度しか使えない人もいれば、巨大な火炎球を作り出せる人もいる。威力は絶大だが、近接は苦手。使える人も少ないので、魔導師というのは重宝される。魔法を使える人は職にあぶれることはない、と言うと妙にテンションが下がるのでやめておく。

因みに属性魔法を操れるのは魔導師でもごく少数らしい。大体が無属性、いや、個人的に形容するなら衝撃属性か。魔法の砲撃、弾丸等で衝撃を加え、ダメージを与える。威力が高ければ、部位を吹き飛ばすことも容易だ。

属性は炎、水、風、土。派生として、氷、木、雷などもある。光や闇は存在が確認されていない。父親の本の一つにはこの世界の伝説もあり、光の剣を以て闇の勢力を封印したらしい。これもオヤクソクの勇者と魔王のお話。

魔力というものを意識した途端、自身の内に流れる違和感に気付いた。それは日本にいた時には感じることがなかったものだ。それが魔力、だと本には書いてあった。その違和感を意識した時、それは

心臓の位置にあるように思えた。掌を見ながら、流れを意識する。滞留するそれを動かそうとするが、体にもの凄い不快感が押し寄せ、すぐにやめてしまった。

体に産まれた異物――――――いや、この世界には魔法は普通のものだと書いてあった。魔力とは常に人とある物であり、産まれた時からあるもの。つまり、違和感や不快感を抱いたのは、転生した俺自身のせい。俺自身の日常にはなかったそれが唐突に体に産まれた。意識的には理解していても、体が慣れていないらしい。これは地道に慣らしていくしかないか……。

コンコン。

魔力について集中していた意識を、扉をノックする音が途切れさせた。

「はい」

「リフー。シュレアちゃんが呼んでるわよー」

「今いくー」

母さんから声がかかる。因みにリフ、とは愛称のようなものだ。仲が良い人物は大抵俺をリフと呼ぶ。名前はリフエル、たかが四文字だし略す必要性を感じない。人ってそんなに相手の特別になりたくなるのかね、俺にはよくわからない。

シュレア……その名前を聞く度に嘆息してしまう。俺は読んでいた本を元あった場所にしまい、軽めの外着を着て玄関を開ける。

「ちっす」

真っ白な健康的な歯を見せながら、太陽のような笑みを浮かべるポニーテールの女の子。シュレア・コストール。幼馴染というか、一番一緒に過ごしている時間が長い他人。縁側で陽を浴びながら本を読んでいた時、出会った。俺とは逆で、非常にアウトドアな性格。俺を良く外に連れ出そうとする人物で、厄介毎を持ち込む危険因子。

真っ赤な髪をポニーテールに結い、顔立ちは端正。将来美人を約束されているようなもの。身長も高く、腕っ節も強いので、町の子ども達が性別関係なく慕っている。最近家の父さんから剣術、自らの父親から武術を習っているようで、その強さには磨きがかかっている。しかし無類の強さから町の子供たちでは適う者も居なくなってしまい、密かに鉱山内部に行っている、俺を道連れにして。全く、活発な女の子というのは良いが、俺に迷惑をかけるのはやめて欲しいものである。

「じゃ。俺は本を読まなきゃいけないから」

バタン。と扉を閉めたかったのだが、片足を突っ込まれた。そして腕力では負けているので、徐々に扉が開けられてしまう。

「んぎぎぎ……。しぇあっ！」

そんな掛け声と共に扉は全開に。

「ふう……全くもう……女の子が会いに来てあげてるのにいきなり閉めようとするのはないんじゃないかな」

「女の子……？」

「……相変わらず喧嘩売るのうまいよね」

「そんなことはないさ」

と、笑顔で会話する俺達。そして、扉を閉めようとする俺の腕と、それを阻止しようとするシュレアの腕。水面下の戦い、というものを簡潔に表している。

「さて、リフ君。私がここに来た理由が「わかんないね」……せめて言い切らせてよ」

「どうせ鉱山の探検でしょ、シュレアのやりそうな事ぐらいわかる」

「んっふー、私のやりたい事がわかるなんてリフ君も慣れてきたねー。いい傾向いい傾向」

強制的に慣れさせられた、というのが正しい。拒否しても必ず連れて行かれるからだ。ただ連れて行かれるならまだしも、前衛だからより面倒だ。父さんの書籍と瞬間記憶能力、何故だか知らないが剣術の才能があった俺は、力ではシュレアに負けても、技を合わせればシュレアは俺より圧倒的に弱い、というより俺が強すぎる、が正しいか。自意識過剰とかではなくマジで。

「はぁ……それで？またあの洞窟？」

諦めた俺は、ため息を吐き、シュレアの話に耳を傾ける。そこで満面の笑みを浮かべるシュレア。

「ま、確かに同じ洞窟なんだけどさ。その洞窟内に新たに細道が見

つかったんだって」

「新しい魔物とかいそうだけど」

「それはありがたいね」

新種と戦うのは大抵俺だがな！

この子の戦い方は荒っぽすぎて見ていられないんだ。まぁ、戦闘に関しては聞き分けは良く、且つ学習能力が高いので、一回戦えば、その後は怪我をする可能性がグッと減る。とはいえ、怪我されると俺が嫌なので、極力守っている。

「さ、行こう！」

――――――鉱山内、洞窟一層目

お互いある程度の武装はしている。だがその武器はシュレアが自宅から持ってきたものだ。シュレアの父親は鍛冶師だ。だから武具のストックはあるし、数個程度持って行ってもわからないらしい。いやいや、把握しとけと言いたい。

俺はナイフだ。重い武器は、筋力がない俺では動きが鈍くなり、かえって戦闘がしにくくなり、狭所での戦闘も長い刀身では戦い辛い。それに魔物も結局は生身の生き物。急所を狙えば殺すのは簡単だ。だったら子供の利点でもあるすばしっこさを最大限に利用させてもらう。魔物を死角から近付き、一撃で仕留める。俺とシュレアしか居ない現状、一番効率が良い戦い方だ。

因みにナイフは三本ほど装備している。理由は、まずナイフ自体が

折れやすいから。刀身の素材は鉄で、数回程度戦った程度で折れるとは思えないが、戦闘回数や敵の数はわからない。

第二に、複数を相手にした時用。まず相手に刺した時、一本では抜き取らねば次の行動は起こせない。そして最悪の事態、ナイフが抜けない。敵の肉が硬かったりもあるし、俺自身が非力なので、可能性は低くない。ナイフを失っての戦闘は不可能、且つ武器もないので逃げるのも難しい。そして、緊急防御。攻撃中は防御できないため、がら空きになる。その隙を埋めるのが次のナイフだ。完全には防ぎきれないだろうが、致命傷は避けられるだろう。

そして最後、仲間用。緊急時、ともに戦う仲間の武器がない、という状況を避けるため。シュレアは短めの剣、ショートソードを二本差しているが、それでも可能性はある。

要するに、何事も念には念を、って事だ。まぁ念には、と言っても最悪の事態を最低限防ぐだけでしかない。もっと安全面を考慮するのはもっと色々出来るようになってからだ。

こうして戦闘に関して一切躊躇いがないのは、ここ数年、シュレアに関わってきたからだ。最初は躊躇いながらも、徐々に慣れていき、最近は躊躇いすらない。魔物は敵、倒すべき相手、と割り切ることが出来たからだろう。

現在。坑道から続く脇道には灯りがない。というか入口が木の板で封鎖されている。が、取り外せるようにしておいたので、大人は知らない。細道を進みながら、カンテラを翳す。カンテラは二人とも装備しているが、俺が点け、後ろにいるシュレアは腰に付けたままだ。

道のりは大体見なくてもわかる。何十回行ったと思ってるんだ。そして何度頭をぶつけたか。でここには毎回傷をつけていたが、前髪のおかげで気付かれた事はないがな。

とまぁこんな感じで洞窟内を探索中。奥へと進んでいくが、中々道幅が広くならず、狭いままだ。このまま戦闘になれば、逆に有利ではある。が、このまま道が無くなれば、収穫がなくなってしまい、来た意味がなくなってしまう。こういうのは面倒ではあるが、収穫がないのは勘弁願いたい。

「あ、広場に出たみたい」

カンテラの灯りでは壁が見えない程度に広い場所に出た。しかしいくら探ろうとも、何もない。壁伝いに歩くが魔物もなにもない。無論、中央にも行くがない。おいおい……だから収穫がないのは勘弁だって……。

「きゃあ！？」

「シュレア！？」

シュレアの声が響き、振り返るがシュレアの姿は無く、カンテラが地面に転がっていた。居ない……？あの叫び声からして突然何かが起こったみたいだが……もしかしたら隠し扉みたいなのがあるのかもしれない。俺はカンテラが落ちている付近を念入りに調べる。

と、地面を壁の丁度間に奇妙なでっぱりを発見。触ってみると押せるようだ。恐る恐る押してみる。すると壁に穴が出現、シュレアのカンテラを落としてみる。どうやら多少急な坂道になっているようだ。何があるかわからないが、シュレアが危険な目に合っている可

能性もあるので、勇気を出して落ちてみる。

ドスン

「痛っ……！」

尻を思いっきり地面にぶつけた。さすりながら周りを見渡す。そして気付くが、ここには灯りがある。しかしカンテラや松明は一切見当たらない。集中して見てみると分かるが、光源はどうやら壁から所々出ている鉱石のようだ。確かあれは……ライトストーン、だったかな。父親の書籍に鉱石に関する書物があり、それによれば結構レア度の高い鉱石で、それ自体が光源であり、灯りとして使えるが、硬度が小さいため武具に使用する場合は他の鉱石と混ぜて使わなくてはならないらしい。

生憎、鶴嘴（つるはし）等を持っていないので、機会があれば鶴嘴を持って鉱石を堀に行くのも悪くないかな。

ま、戻り道を確保できたらだけどな。

……あ、珍しい鉱石のせいでシュレアの事忘れてた。ライトストーンから目を離して少し周りを見てみれば、シュレアは居た。というか、その奥にある祭壇のような場所が目立つ。シュレアを突っ立っており、近付いてみれば、シュレアも祭壇に目がいっているようだ。

そこだけ、輝く柱二本が立っており、その中央には、何故か剣が、浮いている。透き通るような蒼穹の刀身。鍔まで美しい装飾が成されており、途轍もない威厳や風格を醸し出している。見ただけで、それが普通でない事は誰でもわかるだろう。

「シュレア……」

「……あ、リフ君。あれは……」

「多分、普通じゃない。それにこの場所……」

荘厳は雰囲気。神秘的な雰囲気。そういった表現の仕方が多数出てくるほど、この場所は色んな物が渦巻いている。不気味、といったものもあるかもしれない。

あれは……取ってもいいのだろうか。個人的に、あの剣を見た瞬間から何か俺の中にあるものが蠢いて落ち着かない。これは……魔力か……いままで不快感しか感じなかったが、今は全く感じない。

「う……近づけない」

「え？」

シュレアが少し苦しそうな表情を浮かべている。シュレアより一歩、また一歩と前に出るが、そんな感覚は一切感じない。

「……シュレア、俺がとってみる」

「え……！？リフ君……！？」

何故近づけるのか、といったような思考が表情から読み取れる。俺は落ち着かせるようにシュレアの肩を叩くと、そのまま剣に近づいた。そして、深呼吸してから、その剣の柄を握る。

「うわっ！？」

剣が急に輝きだした。視界が潰され、咄嗟に目を閉じる。そろそろか……と目を開けると、俺の手から剣がなくなっていた。

「あれ、どこに……？」

「リフ君、左手」

シュレアに言われて左手を見てみる。俺の左手の人差し指には見慣れない蒼穹の宝石がついた指輪が。こんな物に見覚えがないし、剣も消えた。剣が指輪形態に変化した、というのは容易に想像できる。

しかし……どうしてこうなった。

そうして剣が浮いていた所の奥を見てみると何やら文章が書いてある。最初当然ながら文字を知らなかった。ただ幸いな事に赤ちゃんだったので、何も疑われることなく文字を勉強できた。だからここに書かれている文章も読める。

「『炎龍を封印せし氷王の剣、ベイルグリーズの新たな所有者に選ばれし者よ、この剣を平和のために使う事を私は願っている』……炎龍、氷王の剣、選ばれし者、ねぇ……」

テンプレというかなんというか……ってうおっ！？

突如指輪が輝きだし、俺の左手に蒼穹の刀身を持った剣が現れた。なんでいきなり現れたのか。

「……ベイルグリーズ」

剣が輝きだし、指輪となって俺の指に戻った。やはり予想通り、名前を呼んでやれば出てくるようだ。使いやすいし、体から何か抜けたような感覚もない。だから展開に魔力を使う、といったこともないのだろう。

「リフ君！魔物が！」

「！？」

シュレアの慌てた声が聞こえ、振り返る。どこからやってきたのか、片手に刃がボロボロになった鉄の剣、もう片方には欠けた盾も持つ、緑色の鱗を持ち、鋭い目を持った二足歩行のトカゲ、リザードマンが三体。

「なんか突現光ったと思ったらそこから出てきて……」

震えるような声。袖を握る手は震えている、相当怖いのだろう。正直、俺自身も怖い。リザードマンというのは書籍でしか見たことがなく、実際に見るとその迫力に気圧される。が、女の子の手前、恐怖している暇はない。戦えるのは俺しかいない。

リザードマンがじりじりを間合いを詰めてくる。

「シュレア、下がって。こいつは俺が倒す」

「で、でも……」

「多分、予想だけどこいつはさっきの剣を試すために現れたと思う」

単なる予想の範疇を出ないが、これは剣の所有者を試すための罠だ

と思う。剣を入手した瞬間発動する何かがあったのかもしれない。

「ベイルグリーズ」

名を呼ぶと指輪が輝き、剣が俺の左手に現れる。一切重さを感じないから、俺には丁度いい。しかし、氷王の剣、という割には氷属性の感じがしない。申し訳ないがただ剣、といった感じだ。あの感じからして、能力が消えた、といったような感じはしないんだが……。

っと、思考している間にもリザードマンは近づいてくる。何を落ち着いてるんだ俺は。

剣を構える。三対一。非常に不利な状況且つ力に関しては確実に負けているだろう。腰にあるナイフは投擲で使うか……。投げつけるだけならカンテラも使える、帰りはライトストーンを持っていけばいい。

非力な現状、敵との戦いでは投擲術が俺には必要になってくる。無論ナイフの投擲で戦うのは予想の範囲内だ。

リザードマンの戦い方、弱点も把握している。父親の書籍にそれが書いてあったのだ。まぁそれはそうだろう、未知の敵ならまだしも多数いる敵、攻略法、対処も確立され、世間に知られているのは当然のことだ。

リザードマンの一番の弱点は口。リザードマンは火炎を吐くことができる。その時口を開けるのだが、空気を一定量吸わなくてはいけないため、隙が発生する。その時口の中に投擲具を投げればＯＫ。ただ投擲具を持っていない場合は右胸を貫けばいい。心臓の位置は人間と逆だからだ。右手に盾を持っているのは心臓への攻撃を防ぐ

ため、らしい。

対処、攻略法としては、火炎を吐く時、武器も燃えることを考慮してか、武器を使ってこない。もしくは武器を振りきった瞬間。リザードマンの武器はリーチが長く、片手で扱うため、動作が一々重い。その隙を狙うのだ。

一体のリザードマン目掛けて突っ込む。それに反応してリザードマンが武器を構える。いよいよ相手の攻撃範囲に入った時、リザードマンが剣を振り被ったので、俺は後ろに跳んで攻撃範囲から離脱。剣が振るわれた瞬間腰に差していたナイフを一本投擲、それはリザードマンの目に当り、リザードマンは痛みに悶え、苦しむように鳴き声をあげる。

その隙に近づき、悲鳴をあげるために開いていた口に剣を刺す。脳まで到達し、そして頭を貫く剣。だが血は出ず、リザードマンは風に吹かれた砂のように粒子となって消滅した。

予想通り、こいつはただの罠だ。本来魔物は消滅せず、死体が残る、勿論血も通っている。だが今回は粒子となって消滅し、血も出ない。間違いはないだろう。

地面に落ちたナイフをすかさず拾う。これは僥倖だ。迫るリザードマン二体、動きは鈍いため、回避、思考時間は十分に取れる。持っているナイフは三本あるし、一対一に持ち込めれば剣だけでも楽勝だ。だとすれば……！

「くらえっ！」

二本ナイフをリザードマンの足と顔面目掛けて投擲。同時に迫る攻

撃だ。鈍間なリザードマンの取る行動は二つ。足を犠牲に盾で顔面への攻撃を防ぐか、剣も使って二本とも防ぐか。

顔面を防ぐなら動けなくなる、両方なら接近しようとしている。

奴は顔面への攻撃だけ防ぐと、ナイフが足に刺さり、悲鳴をあげる。ということは……！

ナイフを構える。今俺とリザードマンの距離は、一体はある程度近く、残る一体はもう少し遠い。この距離で動けないリザードマンがしてくる行動、それは……火炎のブレス。

予想通り、リザードマンは大きく口を開けて空気を吸い込み出す。その大きな隙に口目掛けてナイフを投擲。そのまま口から頭を貫くと、リザードマンは粒子となって消滅した。ラスト一体か。

消滅した奴と残りの奴が近いため、ナイフの回収は出来そうもない、か……。まあいい、この程度相手なら剣一本で楽勝みたいだしな。

剣を構える。近接戦は苦手ではあるが……まずは足を狙おうか。

接近し、剣を振り被る。盾を構えられるが、防がれるのは想定な――――――

ザシュッ！

「んなっ！？」

盾では防がれず、剣は盾ごとリザードマンの腕を切り裂いた。痛みに悶えるリザードマン。わからないことはあるが優先事項はリザー

ドマンを倒す事。

「うらぁ！」

下にあった剣を、そのまま振り上げる。腹、頭と順に切り裂かれたリザードマンは、粒子となって消滅した。肉質に関係なく切り裂いたぞ今……まあいい。

「シュレア、無事か？」

「……」

「おい、シュレ――――――」

言葉を紡ぎきる前に中断される。シュレアが抱きついてきたのだ。

「おおおいシュレア、いい一体何を」

「ごめん」

慌てる俺と、今にも泣きそうな声のシュレア。深呼吸した後、優しくシュレアを抱きしめる。

「私のせいで……リフ君を危険に」

「ん……まあいいさ、剣も手に入ったし、それにリザードマンも今なら倒せるってわかったし」

「でも――――」

「おいおい張本人がいいって言ってるのにお前が引きずってどうする」

ゴツンと頭を殴る。普通ならコツンぐらいだが、こいつにはこれくらいが丁度いい。

「痛っ……んもう、か弱い乙女にをそんな強く殴らなくてもさ……」

「はっ、洞窟探検を積極的にするか弱い乙女がどこに居るってんだよ」

「うー……バカぁ……」

「はいはい」

文句を垂れるぐらいには元気になったようだ。

「さて、帰るぞ。これからはこんな探索は無しな。探索する時はちゃんと大人を付ける事。わかったか？」

「……うん」

「よし、いい子だ」

頭を撫でてやるとまるで猫のように目を細めながら気持ちよさそうな表情を浮かべた。この少女のあやし方の一つ、撫でる。頭を撫でてやると借りてきた猫のように大人しくなる。

「さぁてと……ん？」

出口を探すために辺りを見回していると、先ほどまではなかった物が。それは宝箱だった。リザードマンを倒すと現れる仕組み、だったのか？しかしこれだけの仕組みを、なぜこんな場所に……まぁ。とりあえず宝箱を開けてみるかな。

「……」

中に入っていたのは、羊皮紙。ボロボロの羊皮紙に書かれていたのは

『ハ・ズ・レ・♪』

……。

……。

回収したナイフで羊皮紙を滅多斬りにする。何このウザさ。たった一行でここまで人を苛立たせるとは中々やるなぁおい。つか誰だこんなの用意した奴、見つけたらぶん殴ってやる。

だがそこでゴゴゴゴゴ……という音が聞こえる。音のした方向を見る。すると、先程落ちてきた穴が広がり、階段が出来上がった。この宝箱がトリガーになったのか？

「よし、帰るか」

「う、うん」

こうして俺達は無事に洞窟から出られた。大人にも見つかることもなく、なんとか出来た。でもなぁ……攻撃のレパートリーが少な過ぎる。魔法、覚えるべきか。力を付けるべきだな、主に筋力と長期

戦に耐えうるような体力。あまり気が進まないが、体力作りをしなくちゃいけないなぁ。

「リフ君」

「ん？」

振り返ると、シュレアが真剣な表情でこちらを向いていた。

「私、強くなる。絶対、リフ君を守れるくらい強くなるから！」

そう言うと、シュレアは走りだし、町に帰って行った。へぇ……うじうじせずすぐに立ち直ったな。こりゃシュレアに対する考えを改めるべきかな。これもかなりの収穫だ。

俺は今回の収穫を確認し、ほくほく顔で自宅へと戻った。

１―２：六歳になりました（後書き）

六歳にしてはシュレアの言動も子供らしくない場面がありますが、
リフエルの影響ということで

１－３：外界進出への計画（前書き）

四年後です。

書きため分予定より早く投稿。もっと早く書けるようになりたいなぁ……

１－３：外界進出への計画

「バーティカルエア！」

頭上で魔法陣が展開、その中心に収束された風から、直線的に二迅の鋭い風が魔物――――スライムを切り裂く。透けた体の中心部に見える赤い物。スライムの弱点はそのコア、心臓だ。風はそれを切り裂き、スライムは形を保てなくなり、心臓部だけ残して消滅した。その心臓部を取り、腰につけた皮袋に入れる。

あの洞窟での事から四年。俺は十歳になっていたが、周囲の子供たちからは考えられないほど力をつけていた。毎日ランニングに腕立て背筋腹筋。それを数セット熟せたら今度は魔力操作。初期の頃はあまり上手くできなかったが、今では初級魔法なら軽く扱える程になった。魔法は精神を集中、そして魔法名を宣言してやる事で魔法陣が展開、発動する。しかし単に名前を発言するだけではダメで、イメージが大切らしい。

覚えたての頃はイメージ力が弱く、微風が頬を撫でる程度だったが、今では町近くの森に生息する狼型の魔物、ウルフ程度なら簡単に真っ二つにできる。森と鉱山では出現する魔物は当然ながら別で、飽きがこない上、その種に対するある程度の対応の仕方を勉強でき、且つ町は鍛冶の盛んな町、親は戦いに関してはプロ、という恵まれ過ぎた環境。利用しない手はない、まぁ、親を利用する、っていう言い方は語弊があるが……。

因みにベイルグリーズの事は俺とシュレア以外は知らない。最近父さんと母さん――――思考と発言が違うと間違えやすくなるので父さんと母さんで統一――――から剣術と魔法を習っているので、扱いに

は慣れたものの、訓練中の二人はまさに鬼。父さんとの訓練では生傷が絶えず、母さんとの訓練では火傷や切り傷が多数。自主練と体力作りも、多少ながらしているのでかなりキツイ。

が、最近はそうでもなくなってきた。強化魔法を覚えたのだ。身体能力を強化する魔法、一時的に素早くなったり腕力をあげたり。母さんの本を読んですぐに使えるようになり、嬉しくて燥いだのだが、体がついて行かず筋肉はズタボロ。激痛で涙目になりながら数日を過ごした。相応の筋力がなければ体が壊れるみたいだ。できればそういう不完全な魔法より、筋力を補強するための強化魔法が欲しい所だが母さんに聞いた所、そんなものはないらしい。勿体ない。

ああ、そうそう。シュレアはというと……。

「リフー」

「ん、終わったか？」

「うん！そろそろウルフ相手も飽きてきた所」

にこやかな笑みを浮かべながら軽装の———胸部を守るブレストプレートとガントレット———を装備、短パン姿でそこから伸びる健康的な足が非常に魅力的な赤髪のシュレアが、ウルフの体を担いで近寄ってきた。

シュレアはあれから強くなった。剣術は現在では俺の次に強く、しかも強化魔法も限定的にだが使えるようになった、まぁ俺が地獄の訓練で教えたわけだが。因みに今は片手に槍を持っている。剣はすでにかなりの実力となっていて、攻撃の手段を増やすためにも槍を使わせることにした。

……ああ、そうそう、シュレアに対する周囲の男子の目が随分と変わった。十中八九女として成長しているからだろう。年齢的にはまだ少女だが、ポニーテールをやめ、腰まで伸ばしている。表情をかなり柔らかくなり、肉付きも女らしくなってきた。顔だちも今ではかなりの美少女で、そりゃ評判にならないわけがない。

まぁ、シュレア自身は周りの男子に興味がないみたいだが。

「リフは――――あー……何匹？」

「五」

「むぅ……」

頬を膨らませ、子供みたいに悔しがる。可愛さからこの表情はかなり癒される。

「そんな表情浮かべられてもな、俺より弱いんだし」

「そうはっきり言われるとねぇ……」

「自分の実力を卑下しても仕方ないしな」

「まぁね、早く追いつかないと……」

「はっはっは、まぁ頑張りたまえ」

と言いながら、俺は魔物の死体から色々とはぎ取る。魔物の一部は金になったり武器になったりと、様々なものに変えたり使えたりで

きる。ギルドに登録すれば買い取ってくれるようになるが、不幸なことにうちの街、エーデルにはギルドがない。だから換金はできない。まぁ、ただでさえ良い街だし、親孝行というより故郷孝行？だ。剥ぎ取った有用な素材は街の商人さんに、少量の金や薬との交換で渡している。まぁ、今からコネ＋恩作り、っていう魂胆もあるがな。

「ねね、今使ってるそれ、ト……なんだっけ」

「ん？ああ、トンファーね」

「そうそうトンファートンファー。私も使ってみたいんだけどなぁ」

「お前にはまだはやい」

「私の親父かっ！」

と突っ込まれる。俺が装備しているのはトンファーだ。剣は腰に差している。トンファーは最初この世界にはないと、鍛冶師のシュレアの父親、グレイ・コストールさんに特注で作って貰ったものだ。いつも世話になっているからと、ただで作って貰った。まぁ、「今後もうちで買ってけよ？」と言う辺り、ちゃっかりしてるなぁと思った。

このトンファーは鉄製。しかしトンファーは使いやすい、個人的に。振り回して殴ったり、防御したり、持ち方を変えて相手の攻撃や動きを制限したりと、戦い方のバリエーションが豊富。攻撃力は低いが、そこはちゃんと補強できてます。魔法の一種、武装魔法。武器や鎧、体自体に纏わせ攻撃力上昇や補助効果を齎す。強化魔法が内部補強なら、武装魔法は外部強化といったところか。

その武装魔法の一つ、エリアルブレード。武器に風の刃を発生させ、キレ味を増させ、精度が良ければ鎌鼬を発生させることもできる。尚、鎌鼬は俺も使える。ただ武装魔法は常時発動型、維持のために魔力は常時消費され、鎌鼬の発生にでも魔力は消費される。最も、魔力量はかなり高いので、連発は可能だ。

こうも簡単に属性魔法を使ってるが、希少だ。普通に属性魔法を使ってることに両親やシュレアは最初驚いていたが、今では皆慣れっこだ。

「この森も慣れてきたなぁ……」

「まぁな……うーん……一回外にでてみるか」

「外って？」

「違う街だよ、勿論ギルドのある所だから……東のルフェスか」

「おお、いいね！」

この実力がどれ程か、試したい所ではある。年齢的にはかなり幼いが、このままくすぶっていても、実力は上がらない。だったら街の外で経験を積むのもいいだろう。

「両親にはちゃんと許可取ろうな？無断はダメ、だぞ」

「うっ……やっぱり？」

「当たり前だろ。さ、一旦帰ろう」

「そうだね」

――――――――――――――――――――――

「父さん、母さん。ちょっと相談があるんだけど」

「どうしたリフ。お前が相談とは珍しいな」

自宅に帰ると俺はすぐに両親に声をかけた。

「街にいきたいんだ。できればルフェスに」

「なにか目的があるのかしら？」

「うん。自分たちの実力がどれ程のものか、試したいんだ。世の中で通用するかどうか。勿論、金はある程度あるし、薬もある」

「ふむ……ちゃんと計画はしているんだな、感心感心。だがリフ。わかっているとは思うが、金はかなりかかる上、向こうで過ごすなら宿代もかかる。武器だっていつまでもそのままではなく、摩耗していく。言いたいことはわかるな？」

「うん。あまり無駄な金は使わないようにするし、計画的に、余裕を持って行動するよ」

「全く……子どもってすごく早く成長するのね。もうこんなに大人らしくなっちゃって……ちょっと寂しいわ」

あはは……と俺は苦笑する。だって中身は既に社会人並みの精神年齢ですから……。

「いいだろう、街にいくのを許可する。ただ金は渡さんぞ」

「ケチだなぁ……」

「子供想い、と言って欲しいものだ」

冗談ぽく言うと、父さんも冗談で返してきた。まぁ、否定はしないがね、確かに子供想いのいい両親だし。

「いついくの？」

「三日後、かな。デルシャさんが三日後にルフェスに仕入れにいくはずだから。護衛がてらに」

デルシャさん、とはうちの街で商人をしている人だ。かなり良い人で、街からの信頼も厚い。が、エーデルからの商品を結構な金額で売り上げてくる辺り、商人としての資質も十分なのだろう。

「ははは、そこまで計画してたのか」

「まぁシュレアがグレイさんの許可をとるのが前提かな。取れなかったら延長するよ」

「ほほう、俺達、とはそういうことか」

「あらあら」

両親の目がキュピーンと光る。あ、やばい、あれは獲物を見つけた鷹の目だ。

「うむうむ、シュレアちゃんか、いい子だしな。嫁にはぴったりだ」

「流石うちの子、目も一流ね」

ははは、と笑い合う二人。がっくりと肩を落とす俺は、二人を無視して自室に戻った。

とりあえず用意しとくか……。

戸棚に置いてある薬の数々。体力を回復する薬から解毒薬、麻痺を治したり軽減する薬まで。商人のデルシャさんや近所の人、偶に父さんや母さんから貰ったりしたものをコツコツと貯めてきたものだ。ただ消費期限があるので、結構な数減っている。まぁ仕方ない。うぅむ……防腐剤とかないみたいだし、作り方とか知らないが、欲しいな。作成、量産できれば商人相手に売り上げることが出来るし……。

こう考えながら、持っていく薬をリストアップし、終えた後、飯を食って寝る事にした。

１－４：馬車旅の辛さ（前書き）

自分って表現力がないなぁ……と思います。キャラの容姿は感情表現が下手で恥ずかしい

１―４：馬車旅の辛さ

三日後……。

シュレアは無事に許可をとれたようだ、ただ簡単には取れなかったようで。グレイさんは結構な親ばかで、かなりぐずったみたいだが、母親のソウラさんの鉄拳説得（はなしあい）により、それは収まったみたいだ。

そしてデルシャさんの許可も取れた、コツコツと恩を売っていたおかげだ。そして当日になった。デルシャさんの商品を馬車に詰め込む作業を手伝い、そして完了。時刻なんて表現がないが、最近は陽の傾き加減である程度わかるようになった。まだ早朝だ。ルフェスまでは馬車で四日、一日中走らせたら三日で着く。途中二つほど村があり、そこでも色々と調達するようだ。

「デルシャさん、実はこれ……」

密かに貯めていたものをデルシャさんに見せる。

「これは……ライトストーンか！」

驚くデルシャさんに頷く。実はあの後、一人で密かにあの場所に向かい、ライトストーンを手に入れていたのだ。量にして２ｋｇ。今手元にはないが、近くの場所に隠してある。もし需要があるならデルシャさんに依頼して売ってもらう予定だ。

驚いている様子を見ると、結構売れるかもしれない。

「どうです、売れますか？」

「うぅむ……こういう鉱石系統は商人よりも鍛冶師や武具屋に売ったほうがいいな。ただ加工して違う用途に使うなら商人でも売れるだろう」

「違う用途……？ああ、カンテラとかですか？」

「そうだ。ただライトストーンのカンテラは高価でな……一般人にはあまり売れないんだよ」

「デルシャさんは平民相手の商売が中心ですもんね」

頷かれる。商人は貴族相手が主流と、平民相手が主流だという二種類に大別される。最も、少数相手や大別された中でも種類があるらしい。デルシャさんからアバウトに聞いた話だからあまり知らないが。

「自分で売るのが一番良いんですかね」

「そうだな。経費やリスク、需要も考えて、武具屋か鍛冶屋に売るのが一番いいだろうな。ああ、それとギルドでの依頼だな」

「納品依頼ですね」

ギルドでもいくつか依頼に種類がある。それはおいおい、だな。

「そうだ。運よく納品依頼があれば店に売るより確実に高い報酬が得られる。それに納品が早ければ早いほど依頼主にもギルドにも印象が良くなる」

最も、ライトストーンの依頼は少ないらしいがな、とデルシャさんが続ける。希少な鉱石だ。需要もあまりないだろうし、無難に店に売るのが良いか……嵩張るしな。隠していたライトストーンをデルシャさんに許可を取って馬車に入れてもらう。

「ありゃ、私が最後か」

どうやらシュレアが着いたようだ。武器を結構担いでいる。槍二本に剣四本。腰には短剣と剣が左右に一本ずつ差さっている。シュレアは双剣使いだ。力より技と手数で攻めるタイプだからだ。基本的には槍を使わせるが。

シュレアは予備の武器達を馬車に詰め込み、ふぅ……と息をつくと馬車に座った。

「ささ、いきましょー！」

まるで子どものように燥ぐシュレアを見て俺とデルシャさんは笑い合う。

――――――――――――

初めての馬車、初めての外に俺達は胸躍った。森を抜けた先には広大な草原が広がっていた。視界が広がり、遠くには村のようなもの

を見える。これは楽しまざるを得ない。

「わぁ……！外ってこんな広いんだぁ……！」

「こんな世界がもっと広がってるんだ。俺だって狭い一部しか知らないんだしな」

と、目を輝かせるシュレアにデルシャさんが続ける。これがもっとか……ＲＰＧでのキャラ視点ってのは、こんな感じなのかな……。

「村までは結構かかる。疲れたら無理せず寝ろよ」

「了解」

「はーい」

俺達はこの景色を目に焼き付けるよう、じっくりと景色を眺めることにした。

――――――――――――――――――――

「おーい、着いたぞー」

「……うぅん」

結果。寝た。いや最初は確かに景色に興奮を抑えきれなかったんだ

が、あまり変わらない景色、揺れで体を痛くなり、随分を疲れてしまい俺とシュレアは自然と寝てしまった。

周囲はすっかり夜に。夜だと、街道には電灯などあるはずないので真っ暗。これは夜に慣れてる盗賊とか魔物は有利だな……それに夜目を効かせる魔法とかあるんだろうか。

馬車の前には灯りが。どうやら村に着いたようだ。木の柵に囲まれた村、案外広そう。近くには林もある。今日はここに泊まるようだ。

「誰だ……って、デルシャさんですか」

見張りをしていたらしい、櫓の上にいる男性が声をかけてきた。

「後ろのこの子達はエーデルの知り合いの子供たちでね、ルフェスに連れて行くために乗せてるんだ」

「そうですか、まぁデルシャさんの知り合いなら。どうぞ」

デルシャさんが村に入っていく。いつも通っているからだろう、村でもかなり知られているようだ、しかも信頼度はかなり高い。俺達はなにもせず、すんなり村に入れた。そして村人に導かれ、着いたのは村でも一番デカい家。多分村長か誰かの家だろうな。

「村長、デルシャさんが来ました」

「ああ、中に連れてきてくれ」

村長宅に入る。この村にしては広いようだが、エーデルの家々よりかは小さい。奥に招かれると、そこには白い髭を蓄えた老人が座っ

ていた。体はかなり細く、握ったら折れてしまいそうだ。

「よくいらした、デルシャ殿。ん？そちらの二人は？」

「この子たちはエーデルの知人の子供たちです。ルフェスのギルドに行きたいらしく、今回連れてきました。もし宜しければなのですが、部屋を借りられればなと」

「どうも、エーデルから来たリフエル・デリンディアと申します。今回デルシャさんにわがままを言って連れてこさせて貰いました」

「えっ、あ、シュ、シュレア・コストールっていいます！」

「はっはっは、子共ながら礼儀正しいですな。部屋を貸すのは全然かまいませんよ。ただ生憎と二部屋しか空いておらず……二人が同じ部屋になりますが……よろしいですかな？」

「私とリフエルは同じ部屋で構いません。な、リフエル？」

「はい、大丈夫です」

「では決まりですな。もう夜だ。お二人はもう寝るのかな？」

「あー……そうですね……どうする？」

「私疲れたし、寝ようかな」

確かに……馬車旅で疲れたし、馬車でも寝てたが、あれじゃあ流石に疲れは取れない。

「俺も寝るかな……」

「そうかい。階段を上がった先に三部屋ある。奥の二部屋を使いなさい」

「はい、すいません、ありがとうございます」

俺は一度部屋へと入った。質素な部屋だが、ベッドが二つ。客間として使ってるんだろうか。

防具を置き、ベッドに倒れるように入る。少し起きていようと思ったが、ベッドに入った瞬間激しい睡魔に襲われ、そのまま俺は寝てしまった。

翌日……。俺達は村長から朝食をいただき、話をしていた。

「ふむ、行くのは昼前か。それならば少しばかり村を見て回るといい」

「はい、そうさせていただきます」

俺達は村長宅から出た。デルシャさんは荷物の話があるらしいので、出てきたのは俺とシュレアだけ。

「シュレアはどうする？」

「うーん……正直あんまり興味引くものはないなぁ。リフは？」

「俺は色々。穀物とか家畜とか」

「……じゃあ私もそれについて行こうかな」

別に拒否する理由はないので頷いた。

村を見て回る。畑を結構狭い。ただ一家に一つ近くあるので、村自体の面積は広い。いくつか畑が見てわかる位に狭い家があるが、そのような家には大体家畜が。家畜【グバラ】。草食で、ロンメルという雑草の一種を好む。部位ごとに味は違うらしく、まるで牛だ。焼いて食うのが主流。

畑では……一部では鉄製の鍬や鎌を使っているが、それ以外は木製だ。確か前にデルシャさんが鉄製の農具をいくつか売ったとか行ってたな。木製より鉄製の方が長持ちしたり効率がよかったりするんだろうか。

「すみませーん」

「ん……？見ない顔だな」

俺は旗仕事を一旦終え、休憩してるおじさんに声をかけた。年齢的に三十くらいか。逞しい体つきで、日々旗仕事に精を出しているのがわかる。服装は多分、魔物の皮から作った物だろう。所々違う魔物の皮で継ぎ接ぎされている。

「はい、デルシャさんと一緒にエーデルからきました、リフエルです」

「私はシュレアです」

「おう、礼儀正しいな。俺はワルターだ」

「よろしくお願いします。あのーそれで、ここでは何を作ってるんです？」

「ブルムだ。煮ると旨いぞ」

ブルムってのはジャガイモみたいなやつ。生は硬くて不味いが、煮たり蒸したりすると旨い。塩を振るのもいいが、大豆みたいな植物【トアレ】から作った調味料をかけるのが俺的には旨い。

「この村ではどんな物が育つんです？」

「ブルム以外だと野菜と穀物だな。気候もいいし水源も近くて困らない。この村は広く育ててるぞ」

「ほうほう……ありがとうございました」

礼を言い、俺達は畑から離れた。この辺りはいい感じなんだな……でもあまり発展しないということは、何かしらのマイナスがあるんだろうけど……。

「ねぇねぇリフ」

「なんだ？」

「なんで見て回ってるの？」

「ああ、いつか活用するかもしれないからな。情報は収集し過ぎるってことはない。運が良ければ金にもなるしな」

「ふーん……」

あまりわかっていないようだが年齢的に理解できないのも当然か。まぁ俺だってそう重要とは感じていない。記憶の片隅に置いておく程度の重要性だ。ただ、もしもって事もある。もしかしたらこの情報が売れるかもしれない。俺自身が活用する可能性もあるしな。

「……んー、ま、こん位でいいか」

伸びをする。長く同じ体勢だったもんだから体が固くなっていた。

「あ、じゃあさ、私と戦ってよ。最近やってなかったじゃん」

「あー、そういやそうだな。２ヶ月やってない、か……。いいだろう」

シュレアとは昔からたまに戦闘訓練を行っていた。武器は勿論刃物で実戦さながら。死を背後に置いた緊張感と、対人戦の場数を同時に慣れさせるためだ。因みに身体強化を掛けたまま。身体強化が切れたら強制的に終了。素振り千回の罰が待ってる。

「武器はどれにする？」

「うーん……じゃあ槍で」

「わかった」

俺達は一旦村長宅に向かい、村外への外出許可を貰い、馬車から槍を取って外に向かった。

槍はハルバード、槍状の頭部に斧のような形がした広い刃が付き、その反対側には小さな鉤状の突起がある。こんな形状をしている理由は、使用方法が多い。斬ったり、突いたり、引っ掛けたり、鉤爪で叩いたり。これだけで色々出来るため、この世界では兵士の中で最も良く使われている槍だ。

軽く二人で準備運動し、数回槍を交え、今度は身体強化をしてまた準備運動。そこで構える。準備運動しないで怪我したらたまらないからな、準備運動は大事だ。

「さ、シュレア。何処からでもかかってこい」

「いくぞっ！」

シュレアは真っ向から突いてくる。最低限の動きと自らの身体強化をした最高速度を併せ持った最速の一撃。だが一点突破の攻撃は回避がしやすい。俺は軽く横に避ける。

「っ！」

だが向こうはそれを読んでいた。回避した俺目掛けてハルバードを横薙ぎに振るおうとする。が、槍は動かない。

俺の構えたハルバードの斧部分で槍身を押さえているからだ。

「その攻撃方法にも慣れてきたな、流れでやってる。攻撃はたった一回で終わりじゃない。あらゆる攻撃に派生させてこそ初めて脅威になる」

「うりゃ！」

「おっと」

シュレアは俺に背中を向けたかと思うと、槍の石突（槍の尾。攻撃出来るように部分的に硬い物質で補強されている）を振るった。後ろに跳び、それを回避する。

「そうそう、良い攻撃だ。槍は刃だけが武器じゃない。穂先で突き、斧刃で斬り、柄で薙ぎ、石突で叩く。ただ動きがぎこちなかった。多少場馴れしてる奴なら初見でも瞬時に回避されるぞ」

「……毎回思うんだけど、凄く余裕だよ、ねッ！」

「実際余裕だし、なッ！」

「っ！」

薙ぎ払われた槍を後ろに飛んで回避、大きな隙を発見したので、鋭い突きを放つ。シュレアは驚愕の表情を一瞬浮かべたが、すぐに横に回避。

「おらッ！」

先程シュレアがやった事と同じように、槍をそのまま薙る。シュレアはそれを柄で防ぐが、勢いのついた攻撃と、判断の遅れた防御では力の入れ方が違う。シュレアは槍ごと弾かれた。

「シュレア、攻撃で最も大事なのは攻撃力じゃない。攻撃後の隙だ。それを如何に無くせるか。お前の今の薙払いは力に任せ過ぎて大きな隙を生んだぞ、愚行だ」

「ごめん、反省した」

「後身体強化の部分的割合と判断力だな。俺の攻撃方法はお前と同じ、つまりお前にも想定できる事だ。突きからの派生はかなり限られる。そこで身体強化の中で重点を置くのはどこだ？」

「……腕？」

「半分正解。正解は腕と足でした。いくら腕に力を籠めても足に力がなければ踏ん張れやしない。逆に足だけに力があっても腕に力がなければ上体が威力を殺げずに要らないダメージを負う。お前は腕にしか強化の重点を置いてなかった。走り込み百本」

「うえっ、百本！？」

「あったり前だ。強化せずとも踏ん張れる位にならなきゃ部分的身体強化の弱点が補えないだろうが」

部分的身体強化――――――――それは身体強化から派生した魔法。因みに俺が身体強化の無駄を省いて造り出した魔法だ。身体強化とは体全体に行う物だ。しかしそれでは無駄ではないか、と考えた。そこで思いついた部分強化。色々試行錯誤して術式とか弄くり回して、

辿り着いた。

部分強化は通常の身体強化よりも遥かに上昇値が高い。

例を上げるなら、１００の値を全体に振り分けるのが身体強化。１００の値を一部分に全振りするのが部分強化だ。

ただ、一部分を強化するのはあまり意味がない。攻撃は腕だけでなく足や腰も大事だ。自分がやろうとする攻撃方法はどの部分に重点を置くのが最適か。戦闘中にこの判断を行えるか否かで勝てる見込みはかなり違ってくる。

シュレアはまだこの判断が苦手だ。まあ年齢的にも難しいだろうが、外に出た以上、死の危険性は飛躍的に高まる。死ぬ確率を少しでも下げるために、妥協は許されない。

んで。部分強化の最大の弱点、無強化の部位。部分強化した場所と無強化の場所ではかなりの差がでてしまう。それを補うためにも、日々の鍛錬をかかしてはならない。

「せいやッ！」

「っとぉ」

斜めからの払いを後ろに跳んで回避。その後もシュレアの攻撃は続く。払われた槍がそのままま払われる。また回避。

その薙ぎはブラフだった。

力が籠もらない薙ぎ払いは槍を戻すのが本命。俺の着地と同時にシ

ュレアは既に突きの構えをしており、間髪入れずに最速の突きがとんできた。

まぁ、想定内ですけどね。

横に軽く回避した後槍で叩きつける。地面に突き刺さる槍を足で踏みつけ、俺は穂先をシュレアに向けた。

「ん、中々良い攻撃だった。槍を戻す動作にもうちょい力を入れられるようにしないとな」

「むー……何時も通りだけどダメ出しばっかだなぁ」

「そりゃあな」

そう言いながらも俺はシュレアの成長に内心驚いていた。確かにスパルタ且つ俺の両親からもある程度しごかれていたが、ここまでとは思わなかった。

しかもサブ武器で、年齢もまだ子供、才能があるんだろうか。まぁ冒険者――ギルドに登録している者達の総称――がどれほど強いかはわからないがな。

「おーい二人とも」

「あ、デルシャさん」

デルシャさんが声をかけてきた。多分訓練の区切りを見計らってきたのだろうと思う。

「そろそろ行くぞ」

「あ、はいわかりました。さて、行くか」

「ふー……ん、わかった」

――――――――――――――――

馬車に乗る。前より積載量が多いのは、村の物も載せたからだ。ブルムやその他の野菜が多数載せられている。ただその代わりいくつか無くなっている物が。多分だが、村で売ったのだろう。

……やっぱり揺れる馬車。俺とシュレアが寝るのに、そう時間はかからなかった。

1―5：東の街ルフェス

「さぁ、着いたぞ」

……数日の旅。俺達はいくつかの村を経由しながら漸くルフェスの街に着いた。囲まれた高い壁、舗装された道には同じような馬車が並んでいる。

入り口には兵士が数人。検問だろう、別に怪しい荷物もないし別段気にする事はない。

十数分経っただろうか、漸く俺達の番が回ってきた。

「――――――」

「――――――」

デルシャさんと兵士がなにやら話をしたら、通された。馬車から身を乗り出して周りを見る。家々はエーデルよりも良い素材で作られ、道には商店が沢山並び、屈強な男たちも沢山、多分冒険者なんだろう。

こんなに活気があるのは前世以来だな……ちょっと感動した。

シュレアもこの圧倒的な活気に口が塞がらないようだ。

と、色々見回していると、馬車が止まった。

「この店だ」

《デルシャの道具屋》と書かれた看板が見える。他の商店と同じような大きさだ。

「こっちにもお店あったんですね」

「まぁな、資金に余裕もあったしな。こっちでも店を持っておくのは悪くない」

「へぇ……」

馬車を裏口に止め、荷物を裏口から中に入れていく。

「……よし終わったな。二人とも、お疲れさん。これからどうするんだ？」

「まずは宿ですかね。宿がちゃんと取れたらギルドとかに」

「そうか、わかった。俺は後六日こっちにいるから、何かあったら来い」

「はい、わかりました」

その後、デルシャさんからギルドの場所と宿を教えてもらい、まずは宿に向かう。

「いらっしゃい」

中に入ると恰幅のいいおばさんが迎えてくれた。

「すみません、部屋二つ空いてます？」

「あぁ、空いてるよ。一泊銅貨５０枚、朝昼晩の食事をするなら追加で銅貨２０枚だね。数日を一括でも払えるよ。７日で銅貨３４０、銀貨３枚と銅貨４０枚だね。一月で１５００銅貨、銀貨１５枚だ」

因みに現在あるのは銀貨１６枚と銅貨２１０枚。銀貨は銅貨１００枚と同じ、んで金貨は銀貨１００枚。銅貨を１円とするなら銀貨は１００円、金貨は１万円。ただ銅貨は日本円に換算すると大体１００円くらいなので、銀貨は１万円、金貨は１００万円だ。

だから一泊５０００円、食事代２０００円。合計７０００円で、所持金は１９万１０００円、シュレアの金も合わせれば２３万ちょい。こう考えるとガキでは考えられない程の金額を所有している。

「じゃあ……７日間でいいか？」

「うーん……。あ、あの、同じ部屋だったらどうなるんですか？」

「あぁ、同じ部屋なら料金はそのままだね。ただ食事代は高くなるよ」

「じゃあ同じ部屋で一月を」

「お、おいシュレア、それでいいのか」

「う、うん。まぁいいじゃない」

お互い何故かぎこちない。まぁシュレアがいいならいいが……。

「はっはっは。わかった、じゃあ一月だね、毎度あり」
おばさんに銀貨１７枚を渡して釣りを貰う。残り銀貨６枚だが武器も薬もある程度あるし、大丈夫だろう。
「しかし、今何歳だい？」
「十歳です」
「十歳？そんな年齢でその装備……冒険者でもやってるのかい？」
「いえ、これから冒険者に。今日は違う街からやってきたんです」
「はー……十歳でねぇ……何か困ったら話なさい、出来る限り力になってやるよ！」
「ありがとうございます」
「ありがとうございます！」
二人で礼をすると、おばさんは笑った。恰幅の良さはそのまま人の良さを表していたみたいだ。
「あたしの名前はボーレルさ」
「俺はリフエル・デリンディアです」
「シュレア・コストールです！」
「宜しく。部屋は二階の奥、２１０だよ。これからすぐ部屋にいく

かい？」

鍵が渡される。部屋にはまだ行かなくていいか……やる事あるし。

「まだ行きません、荷物はある場所に置いてありますし、ギルドにも行かなくちゃいけないので」

「わかったよ。ただギルドは危ない連中も沢山いる、騙されたり襲われないように気をつけるんだよ」

娘が居ればついてってやるんだけどねぇ……と呟くおばさんに礼を言い、俺達はギルドへと向かった。

ギルドも結構大きな建物だった。中に入る……うわ、酒臭ぇ……。中ではテーブルを囲んで色んな連中が話し合ったり酒を飲み合ったり……皆それぞれ武器を持っていたりして、冒険者だという事が伺える。俺達は綺麗な女性が座っているカウンターへと向かう。

「すみません、冒険者登録したいんですがー」

白い服は清潔感を表しているのか。容姿も麗しく、だが笑顔で話し掛け易い雰囲気もある。ギルドの職員としてはぴったりだろう。

「あら、いらっしゃい。冒険者登録？何歳かしら」

「十歳です」

「十歳？確かに冒険者登録は出来るけど……」

本当に心配しているような表情だ。

「大丈夫です」

「……わかったわ、じゃあまずこの紙に名前や詳細を書いてね」

しっかりと言うと女の人は納得したのかしてないのかはわからないが、カウンター内部から用紙を取り出した。

名前やら武器やら魔法の有無やら……。

「この用紙は登録票。パーティ募集とかする時に、こちらからの紹介とかし易くなるわ」

ふむ……魔術師が必要とか、パーティメンバーの武装や戦い方によって、募集したい人が違ってくる。依頼ってのは時間が重要だし、短縮、簡潔に出来るのはギルド側にもパーティ側にも良い事なんだろうな。

さらさら～と俺達は用紙に書き込み、職員の人に渡した。その用紙を流し読みすると、職員はカウンターから一つのホルダーを取り出し、用紙を挟んだ。

「では完了です。ギルドでは身分を示すカードが作成されますが、作成には時間がかかります、あと……そうですね、一時間といった所でしょうか」

口調が変わった、冒険者として認められたからだろう。次に職員の人はまた違う用紙を取り出した。規約、だろうか。

「こちらは規約と冒険者として働く上での注意事項となります。重要な点だけ、口頭でも説明させていただきますね」

俺達は職員の話を集中して聞く。要約するとこうだ。

・依頼は四種類。【納品依頼】【討伐依頼】【護衛依頼】【運搬依頼】

・ギルド側は依頼者と冒険者の仲介

・依頼を破棄した際には報酬の二割の金額＋失った依頼品分の金額（質が依頼品よりも良いなら品での支払いも可）

・依頼破棄の回数が一定数を超えギルド側が不利益を被った場合、冒険者免許の剥奪

・ギルドは冒険者同士の問題には一切関与しない

まぁ重要なのはこのくらいか。

これを受諾し、冒険者免許を手に入れたら正式に冒険者となれる。冒険者になれれば金を稼ぐのは普通に働くより容易くなる。まぁ、賭けるのは命だからな、高くなるのは当然か。

尚、ギルドで受諾出来る依頼というのは国が請け負え切れない依頼だ。国には勿論騎士や兵士がいる。が、人数も限りがある上、皆が皆兵士になれるわけではない。

それに配置してる兵士全てを動かせるわけじゃないし、貴族が保有してるってのもある。だから自由に動かせる兵士というのはかなり

限られるわけだ。だから受けきれない依頼も多数出て来る。それを解決するのがギルドだ。

ギルドは各国にいくつも存在し、その規模は既に国も無視出来ない。いくつかの国はギルドに補助金すら出しているくらいだ。だからこそ国はギルドの仕様に口を出せない。

国同士のギルド間の事もギルドが全て支配している。他国間のギルド関係を断とうすれば全てのギルドが敵となり、冒険者はギルドからの緊急命令でその国を訪れなくなる。冒険者が居ないということは酒場や宿屋、武具屋や食事処が儲からない。儲からないとわかった商人も居なくなる。つまりそれだけ経済に打撃を与えるわけで。

無論そんな国で生きていけると思う程国民もバカじゃないので、移民も考えるだろう。そんな事になれば国は崩壊する。民あっての国であり、国あっての民ではない。

国もバカじゃないからそんな未来容易く想像出来る。だからギルドには関与はしないのだ。ただギルドとしても国が崩壊するのは良しとしない。だから本当に緊急の時は傭兵として国の兵士と共に戦う場合もあるし、細かな依頼を熟すという事はそれだけ民に平和が訪れ、ギルド側も国側も経済的にも潤う。

まぁ簡潔に言えば、持ちつ持たれつの関係、というわけだ。

「カードが出来るまでどうしますか？」

「そうですね……」

「じゃあさ、武具屋とか見に行こうよ」

「あぁ、それがいいな。武具屋行ってきます」

「そうですね、それが良いでしょう。ただ武器選びは慎重に行ってくださいね。自分の体格や武器、防具の形が合わなければ戦闘では致命的な弱点になりますから」

「はい、わかりました」

十分わかっていた事なのだが、あまり目を付けられたくはないし、印象を良くするためにも受け答えはこんな感じでいいだろう。

俺達は職員の人に一礼し、ギルドを出た。

「ねぇリフ……あそこの人達……」

「あぁ、まぁ、ああやって睨んでくる連中や関わってくる連中は大抵大した事のない奴らだ。一々気にしてたら精神的に持たない」

シュレアが嫌そうな表情を浮かべる。俺達がギルドに入った時、飲んでいた連中の一部が俺達に視線を送ってきていた。シュレアは年齢的にまだ子供だが、顔立ちからして将来有望、というか確実に美人になる。捕まえてうんちゃらかんちゃらも十分有り得る。

ロリコンの風上にも置けん連中だ。ロリコンとは紳士、幼き子を触らず、襲わずに愛でる、それが本当の紳士だというのに……。

……脱線した。どうやら前世の記憶が警告をしてきたみたいだ。

「そうだね……ま、来たらぶっ飛ばすだけだね！」

そう張り切るシュレア。多分紳士の中にはぶっ飛ばされるのを喜ぶ方もいらっしゃるだろうが……まぁそんなレベルの高い紳士がいるかはわからんがな。

俺達は武具屋に向かう。

からんからんと扉に設置されたベルが鳴り響く。

「いらっしゃ……って子供か」

店の奥から出てきたのはがたいのいいおじさんだった。店の中には剣や槍、斧など幅広……って……あれは……！

「おじさん！あれ何！？」

「お、おう……」

俺は子供らしさで騙す事も忘れ、必死の形相でおじさんに詰め寄る。気圧されるおじさん、だが気になんてしていられない。なんせ……。

「あれは銃っていう武器だ」

そう、銃だった。しかもハンドガンではなく、あれは多分アサルトライフル。何故、この世界にあるんだ……？

「あの銃っていう武器の詳細！」

「あ、あぁ……あれはアルビオンって国で作成された武器でな……だが扱うのは至難の業……。俺は見た目が気に入って買ってみたん

だが誰にも売れないから飾りにしてるんだ」
アルビオン……一度行ってみる価値はあるな……。
「名称は」
「確か、ヴァイパーって言ったか」
聞いたことないな……前世にあった名前だったら多少可能性があったんだが……だがまだ可能性はある。俺と同じ、異世界に迷い込んだ人間がいる可能性が。
「おじさん、あの銃の使い方」
「え？あ、あぁ。魔力を籠めて使うんだ。だが武器に魔力流すという行為は限られた人間にしか使えなくてな……」
「おじさん、あれいくら？」
「お！？え、あ、いや……値段は売れないとわかった時から決めてねぇな……」
「決めてくれ！俺はあれが欲しい！」
「っとだな……銀貨５０枚」
「高い！」
「っ！……ぎ、銀貨４５枚！」

「売れないんだろ、長年！」

「つううっ！……銀貨３５枚！」

「あれじゃ多種の武器の宣伝にもならず場所も取る。あの埃被った様子じゃ整備もしてない」

「くぅ……！銀貨２０！」

「もう一声ッ！」

「あぁもう自棄だッ！銀貨１０枚ィ！」

「買ったァ！」

……

「まぁ金足りないので予約ということでお願いしますね」

「今更猫を被るんじゃねぇ」

あはは……と苦笑いする俺。銃を見たら猫は被れなくなった。まぁ仕方ない。シュレアも何か引いているような感じだが、まぁ仕方ない。

「坊主、名前は？」

「リフエル・デリンディアです」

「敬語はいらねぇよ。そっちの嬢ちゃんは？」

「……へっ？あ、わ、私は、シュレア・コストールです」

「そうか。俺はダイム・ベッヘルだ。坊主……あー、リフエルか。あの銃ってもんを知ってるんだな？」

「扱い方は多少。だけど実戦で使った事はないよ。……ダイムさん、銃を店で本格的に扱おうとしてるみたいだけど、多分無駄だよ。扱えたとしても俺くらいだから」

「ぬあ……！バレてんのかよ……」

「値引きしてくれた代わり。無駄な金は使いたくないでしょ、お互いに」

「はっはっは！肝が据わったガキだな、本当にガキか？」

「ちょっとマセた子供だよ」

「そういう事にしておいてやるよ。さて、と……まぁ予約の必要もねえだろ、どうせ誰にも売れない。んで、実際はなにしに来たんだ？」

「今回は近接武器を見に来たんだよ。ただ銃を見つけちゃったんでね……ちょっと脱線したんだ」

「ふぅむ……武器はどんなのがいい？」

「鉄より硬い材質の……剣かな。シュレアは何にするんだ？」

「うーん……やっぱり私も剣かなぁ。私も鉄より硬い奴がいいです」
「剣で鉄より硬い、か……。だとすると……材質では鋼だな。少々重くなるが……まぁ待ってろ」
ダイムさんが店内に置いてある武器のいくつかをピックアップし、俺達の前に持ってきた。
「まずはこれだな……名称はシュヴァイツァーサーベルってんだ」
ダイムさんから受け取り、じっくりと見る。重さは片手でも多少は振れるから、身体強化すればかなり軽いだろう。片刃の剣だが、切っ先側の3分の1が両刃という独特の刀剣だ。多分刺突を主とした戦い方も出来るんだろう。ヒルトの形状は、握りを守るために結構頑丈に作られている。
「次はこいつ……コリシュマルドだ」
細剣、か。持たせて貰うが、やはりかなり軽い。身体強化をした時はあまり使えないだろう、こいつは却下。
「気にいらねぇみたいだな、ならこれはどうだ。ハンドアンドハーフソードだ！」
長さがかなり長い。持たせて貰うが、重いな……だが身体強化したなら丁度いいくらいだな。握りが長くなっており持ちやすくなっている。形状は両刃の直剣とポピュラーな形だ。うむ……使いやすさは一番だな。
「よし、俺はこのハンドアンドハーフソードかな。シュレアはどう

するんだ？」
「私はシュヴァイツァーサーベルが一番いいかな。今使ってるのは少し重くて。このシュヴァイツァーサーベル二本かな」
「気にいったようで嬉しいぜ。値段は合計銀貨７０枚だ」
「……」
「……あぁわかったよ、銀貨６０枚だ。これ以上は譲れねぇな」
さっきかなり融通きかせて貰ったしな……この値段で手をうつか。
「まぁまだ買えないんですがねー。……合計銀貨７０枚か……。じゃあこの金額貯めたらまた来るよ」
「そんな客はあんま居ねぇぜ……ただこの武器は予約なんて真似出来ないからな」
「構わない。目標金額が大体いくらかを知りたかっただけだから。それがわかれば金を計画的に使えるからね」
「そういう所はしっかりしてんな。まぁ気長に待ってるぜ」
こうして俺たちは武器を決め、店を出――
「リフ、防具は？」
「あ」

「もう帰れよ」

ダイムさんの呆れたような一言に苦笑せざるを得ない俺達だった。

――――――――――――――――

「ではこちらになります」

俺達は防具も一通り見た後、ギルドに戻っていた。丁度カードが出来たみたいで、それと袋を受け取る。銅か何かで出来てるのか色はブラウンだ。表面には名前や様々な詳細と、ランクGと書かれている。袋の方は異次元袋と呼ばれるもので、異空間に収納スペースを持ち、見た目は小さなポシェットだが容量は一体どれくらいかはギルドですら測定不能なのだそうだ。これは冒険者になれば誰にでも配給されるものらしい。摩訶不思議だ。

ランクとは、簡単に言えば強さや信頼度を表している。ランクを上げるためにはそのランクの依頼をいくつか熟す必要がある。一応数としては十だが、依頼主やギルドからの評価によって変わってくる。依頼遂行の内容によってはもっと数を熟す必要がでてきたり、逆に減ったり。

因みに遂行内容や冒険者としての行動如何によってはランクが下がったり免許が剥奪される。

ランクは最高でX。G→F→E→D→C→B→A→S→SS→SSS→Xとなる。因みにランクXは過去に一人しかいないらしく、しかもランクXはその人のために特別に用意されたランクで、元は最

高ＳＳＳランクだったらしい。

当然の話なのだが、高いランクの依頼は危険度が高く、勿論報酬もそれだけ高くなる。ギルドとしても依頼破棄、失敗はなるべく避けたいので、高ランクになるにつれ、条件は厳しくなる。

……あぁ、そうそう。俺のギルドカードは銅で出来ているがランク毎に材質が違うらしい。職員の人から聞いたのだが、ＳＳＳランクはオリハルコンで作られたギルドカードらしい。オリハルコンといえば最高且つ最硬の鉱石として有名だ。オリハルコンは途轍もなく希少で、１ｋｇもあれば金貨１０００枚は下らないみたいだ。

鉱脈を見つければ……じゅるり。

「リフ、よだれよだれ」

「お、おおう……」

欲望が表に出て来てしまった。抑えないと……。

「もう……すみません。カード貰えたってことはもう依頼受けられるんですよね？」

「はい、大丈夫ですよ。Ｇランクの依頼はあちらにある掲示板……あの奥のです、Ｇランクって書いてありますでしょう？それです。……その掲示板に貼ってある紙をこちらに持ってきていただければ」

掲示板はランク毎に掲示板があるらしい。こうして遠目から見てみるとＥやＤランクの掲示板に多く紙が貼ってある。逆にＧやＡは少ない……あれ？

「Sランク以降の依頼掲示板はないんですか？」

「はい。Sランク以上の冒険者の方は受付で直接依頼の確認をするようになっています」

ふーん……結構厳重なんだな。

俺達はカウンターから離れてGランクの依頼掲示板に向かう。うーむ……詳しく見ると依頼種毎に分けられていて見易くなっている。Gランク依頼は運搬・討伐依頼が少なく、納品が多い。護衛依頼がないのはやはり実力も信頼もないランクの連中には任せられないからだろう。

納品依頼……リーム草を5束納品。報酬は銅貨２０枚。ご丁寧に主な採取場所まで書いてくれている。近場にある森林地帯、デリーヌの森にて手に入るらしい。

中々稼げないもんだな……まぁ最低ランクだし仕方ないか。早めにランクアップするためにも一日に三つ、出来れば五つくらい依頼を熟したい。金はまだあるし、報酬よりもランクアップを優先するか……。

他にはバルムを三つ納品やらクラムを五つ納品などなど……。どれも主な採取場所はデリーヌの森らしい。依頼は同時には受けられないが……ならちょい賭けるか。

「シュレア、四つの依頼を同時に片付けるぞ」

「え？でも同時に複数は受けられないよ？」

「あぁ、そうだ。だが納品依頼だ。運良く持ってたらそのまま納品して報酬を貰えるのが納品依頼の最大のメリットだろ？」

「……ああ、そっか！受ける依頼は一つだけだけど、ここで受けてそのまま完了すればいいんだね。採取場所は同じだし」

気付いたシュレアに対し俺は満足気に頷く。まぁ、リスクも多少はあるんだが……ギルドには素材の買取場所もある。もしかしたら道具屋でも売れるかもしれないしな……って。

「おいシュレア」

「なぁに？」

「素材売買。デルシャさんに運んで貰ったウルフやスライム、スケルトンの素材があるだろ？あれ売ればいくらかになるかもしれない」

思い出した。シュレアも今思い出したようでハッとしたような表情を浮かべた。色んな事が多すぎて完全に忘れていた。

「まぁ依頼を終えたあと夜に来よう。まずはこのリーム草の依頼を受けよう」

一番報酬が高い。他を受けてもあまり変わらないが、少しでも確実に稼げるからな。

俺達は職員に用紙を持っていった。

「リーム草ですね。形状はわかりますか？」

「……あー、シュレア、わかる？」

ふるふると首を横に振った。まぁそうだよな。

「ではこちらを。こちらは納品依頼によく出される物の絵や特性などがわかります」

カウンターから取り出したのは分厚い本。主な依頼納品種、とかかれた本だ。受けようとしてる納品の絵もわからないし、これで確認すればいいか……。

数分間シュレアと共に本を見た後、本は返した。まぁ俺は全ページパラ読みしましたけどね、瞬間記憶能力（文章限定）を最大限に利用させて貰った。

「さて、行くか」

「そうだね」

「初依頼みたいですし、もし危険だと感じたらすぐに戻ってきてくださいね」

「はい」

「ありがとうございます！」

俺達は街を出てデリーヌの森へと向かう。デリーヌの森はルフェスから北にいった所にある。出て来る魔物は多彩だが、今回依頼の品はかなり浅い所にある。浅い所には弱い魔物しか現れないため、G

ランク冒険者には丁度良いだろう。

「……」

「……ん？どうしたのリフ」

「……シュレア、今回魔物が出ても身体強化はせずにやるぞ」

「え？なんで？」

「身体強化に頼った戦い方をしてたんじゃ切れた時に対処が出来なくなるからだ」

「んー、わかった」

何となく納得出来ない様子のシュレア。まぁ俺も苦しい嘘をついたが……シュレアが騙せてよかった。

「……ま、せいぜいガキだと思って侮ってろよ」

口元が歪む。先程からバレバレの気配で俺達の後ろから付いてきてる連中が居る。数は三人。多分狙いはシュレアだろう。体目当てか金目当てか知らんが……どうでもいい。俺は正義の味方でもなんでもない。

何が罠でどっちが優位か。その身を以て、味わって貰おうじゃないか……。

俺は自分でも気づかないくらい真っ黒な笑みを浮かべながら、森の中へと入っていく。

１－６：それは冷酷な（前書き）

今回評価分かれるかも……というか流石ご都合主義かも

ふとお気に入りを見る

【９００件】

……ばたんきゅー

とまぁ本当に驚いています。私の作品を見ていただき、そして評価していただき、本当にありがとうございます。本当なら二日後くらいに更新予定だったんですが、皆さんのお陰でやる気が出たので投稿しました。

因みに前の話の武器、ハルバード、シュヴァイツァーサーベル、コリシュマルド、ハーフアンドハーフソードは実在する武器です。これからも実在する武器を使っていきたいなと思ってます。

１―６：それは冷酷な

森の中は中々平和だった。警戒していた魔物も出ず、依頼の品も順調に採取。このまま終われば、個人的には万々歳だ。

「……あ！リフ！」

「ん？あぁ、ゴブリンか」

森の奥から出て来た緑色の子供のような形をした魔物、通称ゴブリン。知能は低いが物を武器にする程度にはあるようで、荒削りな棍棒を持っている。個体は弱いが、集団でいるので巣を相手にする時は用心が必要との事だが……このゴブリンは一体しか居ないみたいだ。

……ゴブリンに集中しているように見せかけて背後の気配を認識する。徐々に距離を詰めてきてはいる。多分ゴブリンを倒した時の一番油断したタイミングで俺を殺し、そのままシュレアを奪う、といった所だろうか。

近づくのは愚策。だとすると遠距離から狙ってくるか……？最低一人はいるだろうが……ちっ、この魔法をもっと精度の良い物に改造しなきゃな……。

俺が使用している魔法、エリアサーチ。広範囲にいる敵気配を感知できる魔法。だが色々と不便で、数しかわからず、しかも地形や高さもわからない上、敵であると認識されていない限り意味がない。改造する余裕がなかったからな……だがこれは最重要項だな。戻っ

たら最優先で改造しよう。

……まぁ、三人くらい瞬殺できる魔法はある。相手が雑魚ならな。

「アボイドゲイル」

周囲に、三人に見つからない程度に風を発生させる。矢は受け流すためだ。矢が来ず、そのまま武器で来ようが流せる。対策は一応しているが……武器や力量がわからないのだから対策が足りない。

しかし油断して貰わないと困るんだよなぁ……加減ってのは本気を出すより難しいもんだ。

「リフー！倒したよー！」

と、思考してる間にゴブリンが片づいたようだ。俺はそれに近付く……と気配が動いた。接近する気配が二つその場で動かない気配は一つ。

サクッと音を立てて俺の横の木に矢が刺さる。

「――しッ！」

振り返り様に腰から二本ナイフを取り出し投擲。前のようなただのナイフではなく、投擲用に作られた謂わばスローイングナイフだ。

「ぐあっ！」

「なにっ！？」

ナイフは弓を構えていた男の胸と腹に突き刺ささり、地面に倒れる男。残り二体。俺は血飛沫を見るが全く動じない。寧ろ冷静だ。敵は敵だ。殺さなくては殺される、弱肉強食。

「てめぇ、何を――――」

言葉を紡ぎきる前に足に身体強化を行い一瞬で距離を詰めて腕に強化を行い、抜剣で首を飛ばす。血が雨のように噴き出る。

「ひっ――――」

「――――逃がさねぇよ」

恐怖で怯え、武器を捨てて逃げようとした男に跳び蹴り。地面を転がる男の上に乗り、剣を突き付ける。

「な、なんなんだお前……」

「お前質問出来るような立場か？今優位に立ってるのはどっちだ？」

「……」

「認識しろ。誰が強く誰が弱いかをな」

「リ、リフ……これは……」

「シュレアか。こいつらはギルドから俺たちを付けてきた連中だ。おいお前、目的はなんだ。正直に言わないと首が飛ぶぞ？」

十歳らしからぬ俺の殺気。それだけで人一人殺せそうな程放つそれ

は、男の恐怖と本能を煽った。

生きたい、死にたくない。従わなければ殺される。男は人生で最速の判断を下した。

「そ、そこの女を奪って、売り飛ばそうと……」

「どこにだ？」

「き、貴族だ……」

「どの貴族だ？奴隷商ではないのか？」

「ど、奴隷商は、もうこの世には、ない……貴族は、グランデ家だ……」

「そのグランデ家とやらはどこにある」

「北の、アルオス、だ……」

「お前達は組織か」

「……そう、だ。女を誘拐して、貴族に売るんだ……」

「本拠地はどこだ」

「お、俺は、末端だから———」

「そうか」

スパッと。

男は頭のない体となって、力をなくした。用済みだしな。今後邪魔をしてくる可能性を考慮するならここで殺しておいた方が良い。

「えほっ、えほっ……」

シュレアは吐き気を催していた。まるで極寒の地にいるように震えている。慣れない事。人の死。自身で切ったわけでもないのにこの状況、結構危険か……？

「シュレア、一つ言っておく。人の死は冒険者にとって間近な出来事だ。世界で最も危険なのは何かわかるか？それは人間だよ。人は人を殺す。自身の欲望のために、自身の身勝手のために。冒険者ってのは魔物だけが相手なんじゃないんだよ。殺さなきゃ殺される。奪わなきゃ奪われる。それが出来ないなら、冒険者をやめろ。向いてない」

俺は震えるシュレアに突き放すような事を言い、死体に目線を移した。所有武器は……ただの剣。材質は鉄だが手入れは行き届いていない。懐の異次元袋を奪い、中を確認。

回復薬が数点と、銀貨２０枚。そして新品の鉄の剣が二本に、ブレストプレートが一枚。食糧として干し肉が数枚入ってるが……他人の食べ物や回復薬はいらないな、何があったかわからないし。

他の死体からも色々と剥ぎ取る。因みに装備していたアイテムは血に染まっていて使い物にならない。

収穫は鉄の剣四本、鉄のナイフ三本、鉄の斧と槍が一つずつ、弓一

つに矢が三十本。カンテラが六つ、松明が十二本、双眼鏡が三つ。金は銀貨が７０枚と銅貨が１３４枚。素材が無い所を見ると売却後か。一番の収穫は弓矢と金だ。銀貨７０枚とか所持金と合わせれば７２枚、つまり７２万。こりゃうはうはだな。

武器の必要金額は銀貨７０枚だが、防具にガントレットとフットガードを四つずつ、ブレストプレートを二つ買う予定で、全部鉄製。必要金額は合計銀貨９６枚だ。

こうやって他人を殺して金を手に入れるのが簡単過ぎるが、リスクは高いし、悪い奴以外にはしたくない。まぁ盗賊を狙うってのもありか、金稼ぎが楽だしな。

んで死体を漁って見つけた物。それはギルドカードだった。ランクを見てみればＤと書いてある、それも全員。この程度でＤランクか……ランクＤまでは楽ってのはわかった、これも儲けものだ。

「……リフ」

「どうしたシュレア」

連中のギルドカードを捨て、俺は震える声で話すシュレアの方を向いた。顔は青ざめているが、目には恐怖が感じられない。

「リフは、怖くないの？」

「怖いさ、人を殺した事なんて今までないし。だけどそんな事嘆いたって意味がない。さっきも言ったろ？殺さなければ殺されるって。だから殺す。俺を狙う奴らを狙う」

「……そっか、リフは強いんだね」

「あぁ、そうだ、俺は強いんだ」

俺は笑みを浮かべながら言った。

俺は強い、そう思ってないとやってられない。俺だって人を殺す事が怖くないわけじゃない。他の意識で恐怖を塗りつぶしてるだけだ。俺は元は日本人。この世界にいる奴らよりも死には慣れてないんだよ。いくら魔物で血を見慣れていても、人を斬った時の感触、断末魔、悲痛な表情。全て俺を追い詰めるんだ。

だけど泣いてなんかいられない、立ち止まってなんかいられない。俺の後ろにはシュレアがいるんだ……いや、誰かのためとか言って責任転嫁しちゃいけないな。全ては俺のため、俺自身が生きるため。

「リフ君……」

シュレアが抱きつき、肩に顔を埋めてくる。震える手は俺の体を強く抱き締め、啜り泣く声も聞こえる。今すぐに折れそうな心が感じ取れる。

シュレアが俺を君付けするのは、悲しい時、甘えたい時。ここで厳しくしてしまうと、シュレアは立ち直れないかもしれない。そっと抱き締め、頭を撫でる。

俺自身も、シュレアを抱き締める事で心が落ち着くのであった。

――――――――――――

「リフ君」

「ん？どうした」

シュレアは泣き止んだのか、俺から離れて目を真っ赤に腫らしながら笑顔を向けてきた。抱き締められなくなったのがちょっと残念だとか思ってないんだかんな！

「私……迷わないよ。怖がらない――とは言えないけど、私だって、死にたくないもん」

意志の籠もった目、力強い声。シュレアは決意したみたいだ。十歳には酷な事だとは思う。だけど慣れないとダメなんだ、いざという時にパニックに陥るから。

「もう大丈夫みたいだな」

「少し辛いけどね……。でもこんな事これから何回もあるんでしょ？だったら慣れるしかないよ」

「冒険者をやめるって選択肢はないんだな」

「有り得ないよ、やめるなんて。だって……」

「だって？」

「ッ！なんでもないよ、なんでもない！」

手をぶんぶんと振るって誤魔化される。顔が多少赤いのは、何故だろう。あ、まだ泣いてる跡が続いてるのか。

「……兎に角、依頼品とその他納品の物を採取するぞ。あと出来る限り魔物を倒そう、中には高額で売れる物もあるかもしれないし」

「わかったー！」

笑顔で応えたシュレアはゴブリンを倒した事に気付き、ゴブリンの角を取りに死体へと向かった。

いつも通りの様子のシュレアを見て、俺の心に渦巻いていた陰気な気持ちは霧散していった。

―――――――――――――――――――――

「ではこちらが報酬ですね」

俺達はギルドに戻り、六つ目の依頼の完了報告を行っていた。報告の銅貨１５枚を受け取る。今回の合計報酬は銅貨１０３枚で、銅貨５枚を支払って銀貨１枚に交換して貰った。

ギルドで硬貨を両替する場合、銅貨から銀貨で銀貨１枚につき銅貨５枚、銀貨から銅貨も同じ。銀貨から金貨の場合は金貨１枚につき

銀貨5枚、金貨から銀貨も同じ。ギルドも案外細かいというか抜け目ないな。

……実はこの商売の仕方、ギルド自体はあまり利益に換算しないらしい。こういう場合料金はかなり高い。というわけで両替商なるものが存在するのだ。ギルドでは1枚につき5枚だが、両替商なら3枚や2枚などで両替出来る。銅貨ならまだしも銀貨の場合相当な金額になるため、より安価な両替を求めるようになるのは当然の事。つまりそこに需要が発生するわけだ。ということは目敏い商人が供給しようとするわけで、両替商という物が生まれてくるのだ。

ただ両替商とは言うがこれをメインにしてる連中は少ない。他の商売がてら、といった場合が多く、ギルドのお陰で新たな稼ぎ方が出てきたので、両替商をしている連中とギルドは仲が良い。仕入れの時に割安にしたり品物情報を与えたりと。

……報酬や依頼完了の合間に職員の人が教えてくれた。愛想を振り撒いておいてよかったぜ、職員とは仲を繋げていた方が色々とやりやすくなるしな。

「それにしても納品依頼のやり方をすぐに見抜くなんてやるわねー」

仲良くなった職員のカレンさんが頬杖しながら楽しそうに言った。カレンさんには敬語は要らないと告げてある。長い茶髪を腰あたりまで伸ばしており、顔立ちはも整っていて、ギルドの顔としては申し分ない。年齢は16歳らしいが、雰囲気、手慣れたような仕事の仕方から、随分と子供の頃からギルドに親しんできたのだと伺える。

「誰でも気付きそうなもんですがねぇ」

「それがそうでもないのよねー。初心者は気づかない事が多いの。で、ある程度ランクが上がって保存してる物が多くなった時、初めて気付くのよ。まぁ、ランクが高くなれば必要分も増える場合が多くなるし、自分より下位のランクは受けられないから、それはそれで遅いのよね」
その点あなた達は偉いわーと頭を撫でられる。むず痒いが、綺麗な女性の柔らかな手で撫でられるのは嬉しい事なので、喜んで受ける事にする。

「むー……」

「ふふ、後ろの子がちょーっと不機嫌だからこれくらいにしとくわね」

不適に笑うカレンさんとむくれるシュレア。シュレアもカレンさんに撫でられたいのか？残念、この手は俺のだ！

「さて、と。君達はまだ依頼を熟すのかしら」

「いえ、今日はもうやめておこうと思ってます。あまり無理してもアレですし、買い取って貰いたい物も沢山ありますから」

「そうね、無理は禁物だわ。わかっているとは思うけど買い取りのカウンターはあっち。あとカウンター横の掲示板は見といた方がいいわ、この部位の買い取り価格が高くなったり、安くなったりって書いてあるから」

「ありがとうございます。ではまた」

「えぇ、お疲れ様」

またね、と笑顔で手を振られる。綺麗なだけでなく可愛い部分も持ち合わせた女性というのは魅力的だ。

「じゃあデルシャさんの所に荷物取りにいくか。シュレアは手荷物の方を頼む。俺は買い取りにいくから」

「うん、わかった」

まぁこういう場合は別れた方が効率的だろう。俺達はデルシャさんのお店に向かった。

――――――――――――――――

デルシャさんの店は既に店仕舞いをしていた。そりゃそうだろう、今は夕刻で、陽も暮れかけている。裏口からデルシャさんの店に入れてもらう。

荷物を取りに来た事を告げると、手伝ってくれるそうだ。売りにいくのは俺なので取り敢えずライトストーンについて聞いてみた。

「ライトストーン２ｋｇか……質にもよるが金額的には金貨１枚にはなると思うぞ」

金貨１枚って事は……１００万円！つまり１ｋｇあたり５０万！武具代払っても所持金は銀貨５０枚以上残るな。これは嬉しい。コ

ツコツと回収しといてよかったぜ……。

「リフ、凄く情けない顔してる」

おうふ……また顔がヤバかったみたいだな。ポーカーフェイスポーカーフェイスっと。

「じゃあ俺は売ってきますんで、荷物お願いしますね」

「あぁ、わかった」

剥ぎ取った物を異次元袋に入れて途中で二人と別れた。ギルドに入る。一人で入るが、酒を飲んだりしてる連中からの視線がくるが、わざわざ気にしてやる必要はない。

買い取りのカウンターへと向かうと、職員ではあるが筋骨隆々の男性がいた。

「すみません、買い取りお願いします」

「あぁ……って」

異次元袋から大量に取り出す。ウルフの毛皮、爪。スライムの心臓、エキス。スケルトンの骨粉、脊髄などなど。すると職員は辟易したような表情を浮かべた。

「これらかよ……」

「いえ、まだ残りこれ位の量が十程」

「――――誰かこっちに回せー！」

悲痛な声に職員が慌てて駆けつけてきた、こりゃ大事になった。まぁ気長に待とう、これがこの人達の仕事だしな。

――――――――――――――――――――――――

「……ふむ。金額は合計銀貨３８枚、銅貨２３枚だ」

「おぉ」

感嘆の声があがってしまった。そりゃまぁそうだろう。今まで溜めてきた素材を全て売り払ったのだ。剥ぎ取った有用な素材は全てエーデルで消費してるし、それ以外でこの金額だ。全てもってきてれば金貨１枚は余裕だったかもしれん。

「ったく一気にこんなに持ってくんなよな。誰に頼まれたんだ？」

「いえ、自分達で狩ってきた奴です」

「……子供はやっぱり、嘘が下手だな。お前みたいな子供がこんなに持ってこれるわけが」

「あの、どうでもいいんでさっさと金ください」

ちょっと意識して睨みつけながら言う。すると一瞬ビクッとしながらも、俺に金を渡してきた。

「それでいいんですよそれで。無駄な詮索は……さて、どうなるんでしょうね」

「……最近の子供ってのは侮れねぇなぁ……」

俺は含みを持たせた笑みを浮かべ、ギルドを出た。……と、そうしていると俺に付いて来る気配が。ああ、またっすか。面倒臭ぇ……ちゃっちゃとやっちまうか……。ただ大通りでやる事じゃないし……裏通りにいくか。

ある地点で路地に入る。やはりついてくる気配……二人か。予想するに、買い取り時の金額を聞いたんだろう。銀貨３８枚もあればあの宿なら２ヶ月以上生活が出来るからな。それに俺の容姿から考えてただのガキだと思っている筈。全く……こういう輩が関わってくるのがまさか一日に二回もあるとはな……なんつーカオスな世界だよ。

ある程度進んだ所でまたまた曲がる。これで大通りからは見えない。それに丁度ある程度広い場所だ。戦いやすい。周囲を見回すが、民家の入り口等はなく、まさに建物の背中の間、といった所だ。完全に裏通りに入った所で男たちが一気に距離を詰めてきた。

「おいガキ、さっき手に入れた金を置いて――――」

、

「なに？」

「ッ！」

身体強化を活用して一瞬で後ろに回り、二人の首にナイフを突きつ

ける。

「な、なんだ……」

「大人しくしろ。お前らに自由はない。従え」

俺が浴びせる途轍もない殺気に、男達は首を縦に振るしかなかった。

「武器を置け。そして金と異次元袋を置いて向こうに歩け。何か一つでも怪しい行動をしてみろ。さっきの動きを見たろ？お前ら如き一瞬で息の根を止められるからな」

脅すと男達は素直に従い、武器と金と袋を置き、男達は歩き出した。ある程度歩いた所で

「――――サダンチェリオ」

両掌に小さな白い魔法陣が展開され、そこから白い光が男達の心臓の位置を音もたてずに貫いた。男達は声をあげることすら許されず、物言わぬ体となった。サダンチェリオ――――無音の一閃。音をたてずに放つ魔法で、暗殺する場合に有効な魔法の一つ。魔力消費はかなり高いが、動きも形状も無駄がない。場所や状況を選び、威力が低く貫通力も低いため、戦闘時に使うには非効率的な魔法。

森で襲われた時にこの魔法を使わなかったのはシュレアがいたからだ。この魔法は誰もいない時以外には使いたくない。惨くもなく、ただ静かに命を狩り穫る一撃は、冷酷過ぎる。

あーあ、またやっちゃった――――なんてな。襲おうとする連中なんてどうせ碌でもない連中だ。殺しても問題ない……わけではないが、

生かしていても余計な事件を引き起こすだけだ。どうせ誰も見てないし、こんな奴らが死のうが誰も悲しまないだろう、向こうが悪いんだしな。

気を取り直して物品回収。今回は血みどろじゃないので異次元袋回収も楽だ。その場で中身を確認ってのは危ないのでちょっと違う場所まで移動する。

えぇっとまず……こいつらの武器だな。剣二本だが、どうやら鋼の剣みたいだ。手入れがあまりされていないのが気になるが使えないわけじゃないが……売れるなら売るか、投擲用に持っておこう。

次は異次元袋だ。

……

……

……

入っていたのは回復薬が数点と、鉄の剣２本に、弓が１つに矢が５０本に木の矢立て。金は銀貨５枚と銅貨３９枚だった。ちっ、しけてやがる……まぁ矢が５０本ってのは思わぬ収穫だな。これで矢の合計は８０本、本数は十分だな。俺は矢は別段要らないんだが……まぁ騙す用にも使えるし、３０本くらいは持っておこう、残りはシュレアに渡すとして。

んー……回収した物品が殺害に見合うかどうかと言ったら、見合わないな。連中の懐からギルドカードを奪い、見たかったのだが、血溜まりに手をつけたくはないので、残念ながら放置だ。

……あー、ダメだ、思考がダーク過ぎる。切り替えよう。次は鍛冶屋にいってライトストーンを売らないと。出来れば高値で売りたい所だが、今後の利用も考えて多少安値でもいいかな。ただなぁ……ここにずっと居るつもりもないんだよなぁ……。

もっと賑わってる街とか、出来れば王都にも行きたい。行く行くはアルビオンまで。銃が何故存在するのか、俺の他に転生者や向かうから来た人がいるのかが非常に気になる所。

そう考えながら歩いていると鍛冶屋に着いた。夜だが、まだ明かりがあり、開いているようだ。扉を開けて中に入ると、もの凄い熱気が伝わってくる。外が涼しかった分、その熱気に後ずさった。

「……あん？誰だこんな夜に」

カウンター奥から誰かが出て来た。もの凄い髭を蓄え、身長は低く、体つきは丸い感じ。ドワーフってやつか。鍛冶の神に愛された種族らしい。故にドワーフは鍛冶師が多い。その体からは考えられない程の力を発揮する。

「夜分に失礼致します。ライトストーンの売却をお願いしたいのですが」

「……歳は？」

「十です」

「……ふむ、武装からして冒険者、目には意志が籠もっていて、底知れない何かもある。体勢には隙がない、なのに初心者のような雰

囲気……お前さん、何者だ」

うわ、何か色々バレてるな……。

「ワシの目は誤魔化せんよ、一体何年鍛冶師をしてると思ってる」

「……参った参った、降参ですよ。で、あなたはそれをどうします？」

「お前さんの情報なんざどうもせんよ。ワシはただ武器を造るだけだ。確かにワシが情報を流せば信じる者は居るだろう、長年やってきた実績があるからな。だが、ワシが長年振るってきたのは鎚だけでな、他を振るうのは苦手だ」

遠回しに情報は漏らさないって事だろう。振るうのは鎚で、権力は振るわないってか……。まぁ、良い関係が築ければいい、聞きたかった実力についてもある程度推測出来るようにはなった。

「それなら良いです。俺としても、武器は敵にしか振るうつもりありませんしね」

「いいおるわい」

ドワーフがかっかっかと笑う。言ったら敵ですよっていう多少の脅しをかけたつもりなんだが、あまり効いてないみたいだ。だけど嘘だとも思ってない感じ。俺の中では中々好印象だ。

「ワシの名前はドレイク。お前さんは」

「俺はリフエルです」

「リフエルか、わかった、覚えておこう。でだ、話を戻すか。ライトストーンの売却だったな」

「えぇ、そうです」

カウンターにライトストーンを出す。ドレイクさんはふむ……と髭を撫でながらライトストーンを見回し、その後色々な道具に載せたりして、計っている。

「質は最高だな。吸収光は陽光。量は２ｋｇで、使用出来る箇所もそれなりにある」

「あの、陽光ってなんの要素なんですか？」

「知らんのか、まぁいい。ライトストーンは光を蓄える性質を持っている。だが問題なのは最初に浴びた光以外は絶対に吸収しない性質でな。ライトストーンは大抵鉱山内に埋まっている。掘り出された時、最初に浴びる光の多くが何かわかるか？」

「光……カンテラとか松明の火、ですか？」

「あぁそうだ。あれも光として認識され、蓄えちまう。火光のライトストーンは非常に安い。次点で陽光だ」

他にも上があるらしいが俺にはあまり関係せず、自然でしか作られないらしいので割愛された。

「とまぁそんな感じで、金額的には……金貨４枚でどうだ」

「えっ？」

金貨４枚とな？

「気に食わんか？ただこれ以上は出せんが……」

悩むような表情を浮かべるドレイクさん。どうやら勘違いしているみたいだ。本当なら逆なんだけどな。

「逆です逆。知人から金貨１枚だと言われてたので」

「あぁ、多分そいつは吸収光の色で値段が段違いなのを知らないんだろう。２ｋｇで金貨１枚なら火光の値段だろうな、しかも質が最高で。陽光よりも上だと安くても金貨８枚以上はするだろうな」

そんなに高いのか……畜生、誰だライトストーンに陽光蓄えたやつ。もっといいやつ溜めとけよ……。

「では金貨４枚で」

「ほいよ」

ドレイクさんから金貨４枚を受け取る。おーすげー、本当に金貨だ。金色が凄く眩しい。

「金貨を見るのは初めてか」

「えぇ、何分まだＧランク冒険者なのでね。金貨を持つのは一つの夢でもありました」

「ふむふむ……。まぁお前さんなら大丈夫だとは思えるが、子供を

狙ったバカがよく居る。金貨を持っているという事が知られればすぐにでも狙ってくるだろう、気をつけろよ……あぁそうだそうだ。一番気をつけなきゃいけねぇのは盗賊だ」

「盗賊、ですか……」

「そうだ。しかも組織を成してる。構成人数は不明だが、話によれば十名以上はいるみたいだ。金目になる事にはすぐに飛びかかってくる連中だ。金貨とくれば少しでも見られたら即狙われる」

「そいつらは一体どんな犯罪をしているんです？」

「誘拐強姦殺人泥棒なんでもありさ。ギルドでも依頼を出しているみたいだが如何せんまだ未知数の相手だ。それにルフェスに居る冒険者は良くてランクB。ランクAがくることは非常に稀だ。ランクBでは流石に盗賊十名以上を相手になんて出来やしない。魔法でもありゃ別なんだがな……」

俺魔法も使えます。寧ろ魔法メインで近接は正直サブなんです。ただシュレアと二人旅になるし、まだまだシュレアを前衛、俺を後衛と役割分担するには敵情報や仲間が少なすぎる。

それにシュレアに当てないようにするのにも気を使う。一人なら乱発出来るし、派手に暴れられるけどな。

しかしそんなにやっててしかも数も多いとなるよ……こりゃ合法的に金が大量に手に入れられるかもしれない。ぬふふ……。

「……リフエル、表情には気をつけろ。凄く黒い笑みを浮かべてるぞ」

「えっ？あぁ、いや、ははっ……」

ダメだな俺。欲とかダークになってしまうと顔にでちゃうみたいだな。どうにか直したいなぁ……。

「盗賊を潰すつもりか？」

「いえいえ別にそんな事はないですよ。ただ――――」

俺は真っ黒な笑みを包み隠さず、ドレイクの目をしっかりと見据える。

「――――向こうが仕掛けてくるなら、抵抗はしますよ？」

１―６：それは冷酷な（後書き）

サダンチェリオ……意味としては唐突な別れ
意訳するならさよならは突然に、かな。

１－７：非情の一閃（前書き）

異次元→異次元袋に修正
フロンさん、ご指摘ありがとうございました！

話しだ→話だに修正
ｈａｋｉさん、ご指摘ありがとうございました！

1―7：非情の一閃

「リフッ！」

「ん？どうしたんだシュレア」

宿に帰った時、シュレアが俺に気付いて叫んだ。隣には宿のおばさんのボーレルさんが暗い表情を浮かべていた。

「あのね、あのね……！」

「落ち着けシュレア」

頭を撫でてやる。これは本当に使える技で、シュレアはすぐに落ち着きを取り戻した。

「あのね、ボーレルさんの娘さんの、ヒュレルさんが誘拐されたらしいの……」

「……なんでまた」

「手紙があったの。娘は預かった、明日までに金貨3枚を南の丘までもってこいって」

「いつわかったんだ？」

「さっき帰ってきたらその手紙が店に貼ってあったの……」

「ふーん……で、シュレア。それを俺に言って何がしたいんだ」

「えっ……いや、助けないと」

「ボーレルさん、その誘拐犯は、あなたの予想では噂の盗賊団ですか？」

「！なぜそれを……」

「やっぱりか……シュレア。その盗賊団はランクBの冒険者ですらやらない依頼だ。人数は十名以上。それを、俺たちが？」

「ギ、ギルドで人数を揃えれば……！」

「そいつらは誘拐強姦殺人の常習犯だ。つまりそれだけ被害にあっている人達がいて、その人達が協力し合えばかなりの報酬を用意出来るだろう。だけど解決されない。なんでだろうな」

「そ、それは……！」

「受けた連中はいるだろうさ、どうせ無謀でバカな連中だろうけど。でもな、烏合の衆と組織されて時間が経つ連中、どちらが強いんだろうか。しかも相手は守りで冒険者は攻め。守りの地点を突破するには倍の人数でも足りないもんなんだよ。結果は見えてる」

「……」

「さ、シュレア、部屋に戻ろう。ボーレルさん、食事はいりませんので」

「あぁ、わかったよ……」

ボーレルさんの目は赤い。でも俺たちには何も言わない。本人もわかっているんだろう。噂の盗賊団では相手にならないことくらい。金貨を用意しても帰ってはこない、より搾り取られるだけだ。

誘拐強姦殺人強盗……これを常習してる連中が、そんな甘い事をする筈がない。搾り取れるだけ搾り取り、後は娘さんを強姦、どっかに売りさばく可能性もある。

「リ、リフ……」

「ごめん」

「えっ――――」

部屋に戻った時、俺はシュレアに手刀を叩き込み、意識を失わせてベッドを寝かせた。念のため、扉にはシュレアでは解除不能な魔法の壁を張っておく。

「実を言うと俺も、そんな盗賊に立ち向かおうとするバカの一人なんだ、許してくれ……」

シュレアの赤い髪を手で梳く。日々手入れをしているのか、艶やかでさらりとしている。自然と頬が緩むが、俺は自分の頬を叩いて顔を引き締める。

そして外に出る。エリアサーチを行うと、宿付近には一名程。動かないあたり、やはり見張りか。異次元袋から金貨を取り出し、路地裏を歩く。

……そして俺を認識したか一人が俺についてくる。かかったかな……？

「……おい、ガキ、止まれ」

「……なんですか？」

振り向くと、頭にはバンダナ。片手には鋭いナイフ。そして軽装と、如何にも盗賊とでも言いそうな姿の厳つい男がいた。

「素直に金を出せ……今なら見逃してやる……」

「……」

「おい、さっさとし――――」

足に身体強化。一気に距離を詰めて殴り飛ばし、馬乗りになって剣を突き立てる。

「ぐ……！」

「全く……冒険者も盗賊もバカばかりだな。同じ手しか使えないのかよ……」

呆れてものも言えない。

「さて、と……巷で噂の盗賊さん、こんばんわ。今宵は月が綺麗で、赤が映える頃合だ」

「貴様、俺たちを知って……！」
「まだお前に発言権はない」
「ッ！？」
睨むだけでなく多大な殺気を含ませる。いつでも殺せる、それを教えてやると盗賊は黙った。
「質問だ。質問に正直に答えるなら逃がしてあげる。だけど答えなければ鮮血が飛ぶ。わかるかな？発言を許そう」
「わ、わかった……」
「まずは一つ。盗賊のアジトはどこにある」
「この街の、西にあるでかい屋敷だ……今は使われてないから、俺たちが使っている……」
「次。宿の娘を攫ったな。娘をどうするつもりだ？」
「売るんだよ……貴族に」
「その貴族の名は？」
「グランデ家だ……」
またかあそこか……1日で二回も聞きたくなかったぜ……。
「北のアルオスか」

「あぁ、そうだ……奴隷制度は廃止されてるが……密かに誘拐し、奴隷にしている……」

「お前たちの人数は？」

「十五だ……」

「屋敷には罠があるのか？あるなら解除方法は？」

「罠はない……俺たちでも出入りが難しくなるからな……」

「ふむ……もういいか」

「だったら俺を早く――」

ザシュ

盗賊の首が飛ぶ。殺すに決まってんだろ、生かしていたら絶対に新たに犯罪を犯すだろう。それに金持ってて合法的に殺せるやつをみすみす逃がすわけないだろ。

盗賊の異次元袋を回収。中身は後で確認といこう。先に娘さんを救わないと――ああ、いやいや。盗賊を殺さないと。

俺の目的はあくまで金。娘は二の次だ、そうだ二の次だ。もし居たらの話だ。いたらつれて帰ろう。それでいい。俺はただ盗賊殺して金が欲しいだけのバカな冒険者なんだよ。

俺は不気味な笑みを浮かべ、その屋敷へと向かった。

息を潜め、様子を窺う。

盗賊が話していた屋敷とやらに辿り着いた。確かに大きな屋敷で、結構古ぼけている。ひっそりとした様子は、住処にするには丁度良さそうだ。

エリアサーチで窺うと、入り口に三人、見張りらしき存在を発見。目で直接様子を見る。一瞬月夜を反射したそれは、多分双眼鏡か？

サダンチェリオの射程距離は短い。ここから暗殺出来るような位置ではない、入り口の二人もだ。だがあの入り口付近から狙えばギリギリ届くだろう。

……いや、俺には身体強化があるじゃないか。下からいけないなら上からいけばいい。上から忍び寄り、双眼鏡の奴を仕留め、その次に下の見張り二人を殺す。それでいいか。

俺は見つからないように外壁部を伝いながら、ある程度の位置まで移動、身体強化を使ったジャンプで屋根まで一気に登る。

音をたてないように近付き、双眼鏡の盗賊の後ろに降りてナイフで心臓部を貫く。何も言わずに死に絶え、力を無くした体を支え、ゆっくりと床に下ろす。

そのまま入り口付近まで飛び降り

「サダンチェリオ」

一閃。見張り二人も物言わぬ体となった。確か後十二人だが……正しい数かどうかは定かではない。ある程度幅を持って考えるべきだろう、無論、悪い方向に。

双眼鏡の盗賊がいた場所、二階のバルコニーに再度登り、エリアサーチを行う。範囲を最初に最小限で使用し、徐々に範囲を広げる。普通の魔導師ならすぐ魔力が空っぽになる使い方だが、俺の場合は全くもって平気ときたもんだ。これが転生者ってやつの特権なのかね。

……現実逃避すると多少心が安らいだ。実はこれでも怖いのだ。こんな状況に遭った事なんてあるわけないんだしな。でもま、物のためですからね。

……範囲を5メートルまで伸ばした時新たな反応。四人密集してる状況を見ると、何か遊んでるのかも。他の反応はない。

バルコニーの扉を開け、中を窺う。ランプが数個しかついておらず、最低限の灯りで行動しているようだ。

四人密集しているであろう部屋のノブを回してみる……よし、鍵は閉まってないな。足と腕に身体強化を行う。開けた瞬間サダンチェリオで二人を撃破、残り二人を剣で殺すという方法でいこう。

様子を窺う。

『……っし俺あがり』

『あっ！てめぇ……くそっ、また俺の奢りかよ』

『残念だったな！まぁいいじゃねぇか、どうせ近いうちに金が入るんだしよ、お前の手柄でな』

『しかも定期的に入ってくるときたもんだ！こりゃうはうはだぜ』

『でも宿のババアが自殺する可能性があるんじゃねーの？』

『そのために娘を生かしてるんじゃねぇか。まぁ最も、戻ってくることはねぇがな』

『ちげぇねぇ！つか寧ろアルオスの坊ちゃんに捕まるんだ。死よりも辛い現実だろうな』

『あの豚の性奴隷になるんだ。自分で舌噛み切った方がマシだぜ』

ガハハハハ……と笑い声が聞こえる。怒りとか別に沸いていない。だから冷静ではある、というより逆に助かった。姿形が見えないなら盗賊ではない可能性があったが、こいつらは確実に盗賊だ。

「サダンチェリオ」

扉を開け一瞬で狙いを定め一閃。間合いを詰めて残り二人の首をはねる。声はあげられていないから、誰も気付かないだろう。異次元袋を回収し、壁に耳をつけて隣の部屋の様子を窺う。

……音はないし、エリアサーチにも引っ掛からない。念の為範囲を拡大してみるが、この先の二部屋には居ないみたいだ。

居ない部屋を開けようとする。もしかしたら……。しかし鍵がついていて開かない。こりゃもしかしたら……。

「ベイルグリーズ」

漸く登場、俺を選んだ氷王の剣ベイルグリーズ……の氷が無いバージョン。だが重量もなく、ほぼなんでも斬れてしまうため、こういう鍵は俺には無意味。

木の扉をベイルグリーズでスパスパと斬っていく。勿論音をたてないようにゆっくりと。扉を斬り終え、中を見てみると……。

「ビンゴ、ってか？」

ベッドには女の子が眠っていた。猿轡をはめられ、手足には頑丈な拘束具がつけられている。多分この子なんだろうな。部屋がわかったなら楽だ。他を殲滅すればいいだけ。

……いや、他に捕らえられてる奴がいる可能性がある。

部屋を出て、障壁を展開、俺が解除しない限り入れないようにする。リフューズガード、防御魔法の一つ。物理的な攻撃を防ぐ役割を持つ。普通なら目の前に展開されるだけだが、俺の場合はこうして通せんぼに使える。持続時間は保って三十分。

……

……

……

二階の他の部屋を周り終わる。新たに見つけた盗賊は五人。つまり撃破数は十二。捕らわれの誰かさんは居なかった。あとは一階部分、か……。

階段から下に降り、エリアサーチを行う。……ん？影が四……しかも同じ部屋にいる。

『離せ……ッ！』

『ふん、強情だな。どうせもうすぐ豚男に縋るしかない体になるさ……』

『……！』

『そうそう、その顔だその顔。しかし、珍しい物が手に入ったな。エルフの女、しかもかなりの上物だ。どうやったんだ？』

『はい、宿にいたコイツに目をつけましてね。ついて行った後食事に睡眠薬を混ぜたんです』

『でかしたぞ、こりゃ大金になる。お前には褒美をやらないとな』

『ありがとうございます、お頭』

……エルフ、だと……？

……ブンブンと頭を振る。今はそんな事考えてる場合じゃねーから。長い耳とかブロンドの髪とかに興味を抱いてなんかいられねぇから。

しかし話から誰でもわかるだろうがお頭って事はここのボスがいるわけだ。しかもエルフの娘っ子を誘拐して売り払おうとしてる。うん、弁解の余地なし。

扉を開けて中に入る。そのまま一番近くにいた男の首を抜剣で飛ばす。

「ッ！？一体なんだ！？」

連中が戸惑ってる間にエルフの女を抱え、部屋の隅に移動。女を下ろす。

「ガキ、だぁ？」

「残念だけど、残りはあんたらだけだ。上の連中と見張りを合わせた十二人は死んだ、いや殺した」

「ちっ……じゃあ残りはこれだけかよ……」

うん、予想通りバカだったな。こっちが殺害人数を言い、あちらは確認。これで最大人数が把握出来た。お頭とまで言われてる奴だ、人数を把握してないわけがない。

「お頭、こんなガキの言う事聞くんですか！？」

「バカ言うんじゃねぇ。さっきの一撃見たろ。それにこの殺気……

信じないって方が信じられねぇな」

「そこまで冷静で居られて、他人を従えるくらいには知能もあるのに、なんでこういう道に入るのかねぇ」

「入らざるを得ないっていう事もあるんだよ」

盗賊の頭が睨みつけてくる。恨み辛み……あらゆる負の感情が俺を覆い尽くす。それだけ厳しい環境に生きてきたんだろう、そして自分の未来に選択肢がなく、選ばされた人生だったんだろう。

だが――――

「――――知ったことかよ」

足に身体強化を行い、間合いを詰め、腕の身体強化によって首を飛ばす。続け様に子分の男の首をはねる。これで終了。盗賊団は壊滅、かな？

「さてと……」

俺は床に大人しく転がっていたエルフを拘束している鎖を見る。頑丈だな……まぁいいか。助けるためには致し方ない。

「ベイルグリーズ」

俺は蒼穹の剣を展開して鎖を斬る。

「その剣、まさか……」

「うん？知ってるのか？」

手首や足首を動かしながら立ち上がったエルフの女。確かにブロンドの髪、それを腰あたりまで長く伸ばしており、身長は高い。１７０はあるんじゃないだろうか。顔立ちは鋭そうな目に蒼穹の瞳。肌はまるで雪の如く汚れ無き姿で、顔立ちは端正、まさに美人といった所か。だがそんじゃそこらの美人ではない。まるで眩く光る宝石のような美しさを持ち、剣のような鋭い強さも感じる。

結論：エルフって、いいわぁ。

「……えぇ、知ってるわ。でもその話はあとで。先に礼を言うわね、ありがとう」

「ん。まぁ精々恩を覚えておいてくれ」

「中々面白い返し方ね……。勿論恩は返すわ」

「しかしこの惨状やさっきの状況を見るに、あんたは慣れてるのか？」

「さっきの状況？」

「あぁ、俺があんたを助けた時一切声を発しなかったろ？俺の意識を削がないように」

「えぇ、その通りよ」

そう、この女はイレギュラーの介入に対して一切声を発していなかった。盗賊の一人が死に、自分が抱えられた瞬間自分を助けるだろ

う、と瞬時に判断したのだろう。逃げられるチャンスだ。そのチャンスを持つ人間の邪魔をしてはならない。それが分かっている所を見ると、場数を踏んでいるのかもな。

「自己紹介は……あとにした方がいいわね。あなたは私を助けに来たわけではないみたいだし」

「そう。俺は盗賊の異次元袋を貰いに。んであとオマケで人質の回収」

「……そういえば、さっき連中が話していたわ、娘を誘拐したって」

「その人だよ。俺は異次元袋を回収してるから、あんたは自分の装備とか探すといい。どうせどっかにあるだろうし」

「そうさせて貰うわ。あとで入り口に集合しましょう」

「わかった」

……

「来たわね」

エルフの女は入り口の扉を開けて、寄りかかって待っていた。腰には銀色の鞘がささっており、シュレアや俺と同じブレストプレート

を装備している。
因みに俺は意識がない娘を背負っている。身体強化をしているので重さは全然無いが。
「重くないみたいね。魔法？」
「あぁ、身体強化の魔法だ」
「……一体何歳よ」
「あんたが色々教えてくれるなら、教えてあげるかもな」
「そう……とりあえずは戻る方が先決ね」
「この娘を知らないとなると、宿は別なのか？俺の宿の主はボーレルっておばさんだけど」
「私の所は狼人族のおじさんよ。じゃあバラバラになるわね。明日、時間あるかしら」
「あぁ、こっちに来たばかりだし、あるにはあるかな」
「じゃあ明日の朝、ギルドの向かいに食事処があるからそこで会いましょう」
「わかった」
「あぁそうそう。その剣の事、エルフ以外は知らないわ。会った時にそれについて話してあげる」

「……」

途中まで道を一緒に行き、大通りにでた所で俺たちは別れた。しかし……エルフはベイルグリーズを知っているのか。その辺を詳しく聞かないとな……あとあの女が旅してた場所についても出来る限り情報が欲しい所。

まぁ、礼としてそれを受け取れるだろうから心配は要らないだろう。場合によっては金を払うけど。

そう考えている内に宿についた。というか時刻は既に夜中らしく、人通りもない。宿も寝静まっている。俺はこっそり宿に入る。むぅ……。あ、そうだ。

椅子に意識のない娘さんを座らせ、管理室の扉を思いっきり叩く。結構音が響いたのか管理室の向こうからドタバタと音が。どうやら起きたみたいなので、俺はそそくさと部屋に戻り、ベッドに入った。

シュレアは未だ失神中らしい。申し訳ないことをした。

『ヒュレル……？ヒュレルなのかい！？』

おばさんの嬉しそうな叫び声が聞こえる。俺は自分でも気付かない内に小さな笑みを浮かべ、長かった1日の疲れを癒やすかのように深い眠りに落ちた。

１―７：非情の一閃（後書き）

こういう展開は好みがわかれますね。俺はそこら辺特に気にしない質です。
しかし自分ではわかっていても読者にはわからないという物が多くみられます。自分の文章力と説明不足さが酷い……どうにか改善しないと

1―8：アイリス

「……うぅん……？」

「おはようシュレア」

「あふ……おはお……」

所々髪が跳ねて寝ぼけ眼のシュレアに癒やされつつ、俺は自身の頬を叩いて眠気を飛ばす。俺は寝覚めはかなり良い。前世でもそうだったが転生してからはもっと、寝付きもいいしな。

「……あ！ヒュレルさんが！」

「ヒュレル？……あぁ、娘さんか」

「……あれ？あの後私どうやって寝たんだろう……」

どうやら俺が失神させた事は記憶にないらしい、ありがたい。俺はシュレアの様子に苦笑しつつ、先に一階に降りる。

「おや、中々お早いお目覚めだね」

「おはようございます」

ボーレルさんとその娘さん、ヒュレルさんが笑顔で挨拶してきた。最早昨日のような悲しい表情は微塵も見えない。

「ヒュレルさん、戻ってきたんですね」
「あぁ、昨日深夜ここに寝ていてね！きっと誰かが助けてくれたんだ、私を起こしてくれたしね。あぁ、感謝してもしきれないよ……」
「私も、会ったらお礼を言いたいなぁ。あのままだったら、私……」
「悪い未来を想像しても仕方ないですよ。助かったんですしね」
「そうだね。さ、今日の朝飯は豪勢にいくよー！」
「あの、出来ればあっさりめで――――」
俺の発言は、全く耳に入っていないようだ。朝から重い物が来ないように願いたいものだ……。
「あ、あれ……ヒュレル、さん、なの？」
「あら？」
シュレアが降りてきて、すっかり元通りになった宿の二人を見つけ、俺も普通に椅子に座っている。困惑しているシュレアにヒュレルさんが近付いていく。
「おはよう。ええ、私がヒュレルよ」
「あ、おはようございま……うぅ？あれ、昨日のは……？」
「誰かが私を助けてくれたの。その人にお礼を言いたいんだけど……わからないのよね。もしわかったら教えてね？」

ヒュレルさんが冷水の入った杯を出してくれた。朝にこれは効く。

「え、あ……」

シュレアが俺を見る。俺は出された冷水を飲みながらシュレアに少しだけ笑みを見せる。それを察したか、シュレアは口元に笑みを浮かべ

「はい、わかりました」

と、ヒュレルさんに笑顔で答えた。

それからというもの、女同士話が合うのかシュレアとヒュレルさんの会話が止まらない。

……まぁ、こういう騒々しいのも悪くないな。

――――――――――――

俺とシュレアはギルドの向かいにある料理店に来ていた。まだ昼前所か朝なので客は少ない。シュレアには多少ながら事情は説明してある。多少驚いてはいたが、すぐに納得してくれた。

「で、そのエルフの『女』ってなにさ」

「あのぅ、ですから説明したじゃないですか……」

「……」

伝令！助けてください！

なんか盗賊殺した事よりエルフの女って方が気になっているらしく、凄い睨まれてます。自然と敬語になってしまった……。

「あら、もう居たのね」

「あ」

「えっ？……うわぁ……！」

聞いた事のある声。そちらを向くと先日のエルフが立っていた。俺らが視線を向けると笑みを浮かべながら手を振ってくる。シュレアはエルフの美貌に目を奪われているらしく、視線では追うものの、口は閉じられない。

「さて、と……あら？そちらのお嬢さんは？」

「こっちは連れのシュレアって言うんだ。……おい、シュレア。はしたない」

「……はっ！？あぁいやいやすみませんごめんなさい。シュ、シュレア、コストール、です」

「俺はリフエル・デリンディアだ」

「私はアイリス・エリュネーゼよ。見てわかるだろうけど種族はエルフ。宜しくね」

「よ、よよよ……！」

「あら、あわてちゃって、かわいいなー」

「か、かわ……ッ！？」

美貌のエルフ、アイリスに見詰められてシュレアはかちんこちんに。まぁこんな美女見たことないだろうしな。……俺？みたことはないな、数年後に見るコトになるだろうけどね。

「話が進まない」

「そうね。で、まず聞きたいのは昨日の事についてそちらのシュレアちゃんに話してあるかって事」

「勿論話してある。剣の事も知っている」

「ならいいわ。聞きたい事はあるかしら」

「まずは剣についてだ」

「剣ね。剣については詳しい事はあまり知らないんだけど、今その剣は力が失われてるわ」

「力が失われてる？……やっぱそうなのか。道理で氷のクセに……」

「そういう事。でも復活させる方法はあるわ。精霊石を使う事」

「精霊石？」

「精霊石っていうのは精霊の魂の結晶。死ぬ時に結晶として残るの。でもね、剣を復活させるためには生半可な精霊石ではダメなの」

精霊……とは属性魔力が収束し、意識を持った存在だ。エルフと精霊はお互い助け合っていきている。精霊自身力はあるが打たれ弱い。そういう面でエルフに助けて貰い、エルフは精霊の力によって多種族よりも魔法が強い。

「その精霊石の作り方は……生きてる内に精霊石となること」

「生きてる内に？」

「精霊は自身を精霊石に変える力がある。でも普通は自分から死にたがらないわ。だからその精霊石が生まれるのは、精霊が自らを託したいと思える相手と出会えた時、かしらね」

「難しいな……」

「あぁそういえば剣を持ってる人を見掛けたら伝えて欲しいって人が居たわね」

「……それは？」

「アルビオンの王、レクセス・ヴァドラエール」

またアルビオンか。

「そいつについて聞かせて欲しい」

「構わないわ、本人も剣の使い手に対してなら、と言っていたし。レクセス・ヴァドラエール。ここ二十年で国を作り上げ、王として全国に多大な影響力を与えるまでに至った男」

……なんだそれ。

「詳しくは知らないけど、漆黒の力を持ち、振るえば万の命を薙ぎ払い、与えれば無双の力を得るとまで言われてる。あぁ、そんな王に知られたからって気にする必要はないと思うわ」

「なんで？」

「彼はね、エルフだけでなく、ドワーフや……いいえ。全種族にとって英雄にも等しい存在なの。彼はこの世界から奴隷制度を無くし、私達他種族と人を等価な存在として扱い、結果その平等な対応によってあらゆる種族からの信頼を得ているの。昔、他種族と人は争いが絶えなかったから」

「賢王ってか」

「そうね。自国の民どころか他国の民からも絶大な人気があるし」

「一度会ってみたいけど……」

「出来ると思うわ、剣があるならね。因みにレクセス王は剣を探してはいるけど無理強いはしないみたい。気が向いたら来いと伝えてくれ、って」

「ふむ……好都合かもしれない。アルビオン……やっぱ行くべき場所か。レクセス王に関してはわかった。次は……そうだな。アイリスは旅をしていたのか？」

「旅はあんまりしてないわね。エルフの里から出て流れていたらここに着いただけ」

「ふーん……」

そこに関してはあまり有益な情報はないみたいだな……まぁいいか。

「他には？」

「特にはないな。兎に角、俺の目的地は決まった。シュレアはどうする？」

俺たちの話を邪魔しないように気を使っていたシュレアに話しかける。

「私は勿論、リフと一緒に行くよ」

「そっか」

シュレアの無邪気な笑顔に自然と顔が綻びる。勿論、か……嬉しい事言ってくれるじゃないの。

「その旅、私も連れて行って貰えないかしら」

「……あんたが？」

「えぇ。なんかあなた達と関わったら楽しそうだし。色んな所を回りたいしね。因みにギルドのランクはBよ」

「ふむ……シュレアはどう？俺としては、仲間が増えるのは有り難い、戦いにも幅が広がるし……」

「そうだね……私も賛成！」

「というわけで宜しく」

「案外あっさりしてるのね。もっと警戒したり渋ったりしないの？」

「種族的にエルフが味方になるとは有り難い。それに警戒しなくても何かやらかそうとした瞬間殺すだけ」

「余裕なのね」

「まぁね」

お互いに含みをもった笑みを浮かべる。

「それでいいわ、何かやらかそうとしたら即座に殺してくれて構わない。するつもりもないしね」

こうして俺達の仲間にエルフの女、アイリスが加わった。

――――――――――

「で、これよ」

「……え」

「あら」

俺達は宿の部屋に戻っていた。因みに部屋はシュレアとアイリスが同じ部屋で俺は別部屋に移ることに。まだ宿泊期間はあるので、ここのギルドでランクアップしつつ、武装とか金を揃える予定だ。

で、今部屋に集まって金を集めていた所。合計金額なんと！

「金貨３３枚！銀貨７３２枚！銅貨５３０枚だ！」

数えるのに苦労しました、それはもう滅茶苦茶に。日本円に換算するとしめて４０３７万３０００円なりぃ……っておい。八桁突破、だと……？

最初いくらだったっけ？え？銀貨数枚？ナニソレー、ハシタガネー？

「リフ、顔！」

「ものすっごい真っ黒な顔してるわよ」

いいじゃない、この金額ならそんな顔したってバチは当たらないだろう。

しかしこんな金額が手に入ったのは、盗賊のお陰と、アイリスの金を合わせたからだ。盗賊は奴隷を売って金を手に入れていた。だからこそ、金は滅茶苦茶貯まっていたのだ。

盗賊の頭が金貨を二十枚以上持っており、アイリスも流石Ｂランクというべきか、金貨を数枚持っていた。

因みに武器などはまだです、むふふ。

「これだけの金……どうするのよ」

「いや、多分これだけじゃ足りない。もっと金を稼いで良い武具を購入したい」

「そうね、先に武具を揃えるとしたら、この金額でもすぐ無くなるでしょうし」

出来ればオリハルコンの武器などが欲しいが……きっと万枚の金貨が楽々飛んでいくんだろうな。あぁ、遠いぜ、オリハルコン……。ま、オリハルコン製の武具ってのはロマンだな。金額に見合うかはわからないし、金の無駄遣いはあまりしたくない。

「ただ武具を購入するならまだの方がいいわね。出来れば……そうね、レクセス王の庇護下の証が欲しいわ」

「なんで欲しいの？」

「高価な武具や珍しい武具を装備してたら目立つだろ？そうなったら関わってくる連中が増える。貴族に目を付けられたらキツいし。

目立つ前に王の庇護下に加わっておけば手出しも難しくなるだろうしな。目立つのはそれからでいい」

「ふんふん、そういう事か。上にいくっていうのは良い事ばかりじゃないんだもんね……」

俺は頷く。シュレア理解力があり、そして人のアドバイスは素直に受け止める性格だ。だからこそ教えやすい。

「次は入手した武器の確認だな……」

金を回収し、武器を纏めて入れた異次元袋から中身を取り出していく。

重鋼（オモハガネ）の剣が二本。
羽鋼（ハネハガネ）の剣が三本、羽鋼のナイフが二本。
鋼の大剣が二本、鋼の剣が八本、鋼の斧が三本、鋼のナイフが六本。
鉄の大剣が二本、鉄の剣が十本、鉄の斧が二本、鉄のナイフが一本。
弓が一つ、矢が五十本、木の矢立てが二つ。

重鋼は鋼よりも重く、そして硬いため、重量で叩き斬る場合非常有効。羽鋼は鋼の硬さを持ちながら鉄よりも軽い。

「……これなら、羽鋼と鋼と鉄のインゴットが造れそうね」

「これくらいなら十分か」

インゴット……とは所謂素材の塊である。普通鉱石の量全てが素材として使えるわけではない。精錬して初めて出来上がるのだ。鍛冶

屋では武器をインゴットにする事が出来る。ただそれなりに金もかかるし、数本分で一本分のインゴット、にしかならない場合が多い。

「私見ではあるけど……羽鋼のインゴットは一つ、鋼のインゴットは四つくらい出来るんじゃないかしら」

「まぁ十分だろう。そういや、アイリスの武器は？」

アイリスが銀色の鞘から剣を抜く。青く透き通る刀身。その細身の直剣は、まるで芸術品のような美しさがあった。

「まさか……ミスリルか？」

「そうよ」

ミスリルきたー！と、内心興奮する。ミスリルは鋼よりも硬く、そして重さは同じくらい。それだけなら多少良いだけだろうが、重要なのはそこではない。

魔法との親和性である。ミスリル鉱は魔力を通しやすく、魔導師にはうってつけの素材なのだ。因みに採掘量は結構少ないらしく、鋼とは比べ物にならない程高価だ。

「エルフは魔法が得意だからね。ミスリルの武装はよく使われるの。魔法を使えない人にとってはその質に対しての金額が割に合わないから使われないけれど」

ミスリルか……綺麗ではあるが俺には必要なさそうだ。……いや、鏃をミスリルに変えた矢を射ったらどうなるんだろうか、武装魔法を付与して射れば中々強そう……まぁ金額がバカにならないから使

われないんだろうけど。

……というより魔法の矢でいいんじゃね？っていうね。だから需要なんてないだろう。矢は大体一本ずつ消費し、大抵回収しない。そんな物だから、明確な利点と確実な結果を齎す使用法が確立されなければ鏃は鉄のままだろう。

「それで……これからどうするの？」

「兎に角ランク上げだな。俺たちランクGだし」

「……あれでランクG。何かと規格外ね、あなた……いえ、あなた『たち』かしらね。まぁ最低ランクだとあまり判断は出来ないけれど」

「私は……」

言い淀むシュレア。本人もあまり否定出来ないらしい。というのもそんな強敵と戦った事ないし、俺は戦ったというよりも一方的に殺した、が正しいからはっきりとした真っ向勝負での強さはわからない。ランクを上げたら強い魔物と戦ってみたいな。

「となると、さっさと納品依頼を熟すべきね。納品依頼のやり方はわかるかしら」

「『運良く持ってたら』納品すればいいんだよな」

「……わかってるみたいね、話が早いわ」

―――――――――――――――――――――

「あれま。まぁた歪なパーティね」

カレンさんが俺をジト目で見てくる。

「というかアイリスちゃん。あなたがパーティ組むとか……青天の霹靂ってやつ？」

「まぁね、エルフの気紛れよ、キマグレ」

どうやらアイリスはこのギルドではソロで戦い続けるエルフだったらしい。ランクも高い上に依頼達成率は１００％、しかも依頼主からの評判もかなり良い、とギルドからすれば非常に良い冒険者だ。アイリスがパーティ、というのが見慣れぬ光景なのか、酒の席についている連中から奇異の視線が突き刺さる。

「ふぅん……ま、別にいいわ。理由について私は追求する権利なんてないし。じゃあこの依頼でいいのね？」

「はい、それで」

受けた依頼はリーム草の採取。またこれか、と言いたくなるが出さ

れてる依頼品の多数がデリーヌの森産なのだ。今回上手くいけばランクFになれるのだ。

アイリスがパーティにいる事で周りの冒険者が来なくなればいいが……逆に子供がいるから狙い目、って考え方もあるだろう。

因みに依頼を受ける人のチームであればランクは高くても構わない。これを活用、というか悪用して金で高ランク冒険者を雇い、効率的にランクを上げる輩もいるらしい。

ただそういう輩は大抵ランクに見合った実力がない。ギルド側としてもそういう輩には目を向けており、依頼主やパーティ申請者に連絡をしているそうだ。

……あれ？俺達それと同じじゃね？実力的にそんな事がなかろうとギルド側はそんな事知らないし、疑わざるを得ない。まぁそうなるのは納得出来るな。

ある程度ランクが上がるか、同ランクまで駆け上がるべきか……ん？あぁ、そうか、それを逆に利用すればいい。

俺達は皆から疑われずに短期間で高ランクへ上がれる可能性が出て来た。アイリスはBランクであり、俺達はGランク。これだけ見ればアイリスを使って自身のランクをあげてるように見られる。

確かに評判は悪くなるかもしれない。でもその評判が直接利益にはならない可能性も高く、アルビオンに行くつもりだ。Bランク冒険者の力を借りてランクを上げた成り上がり冒険者に思われるだろう。それでいい。確かに嫌な意味で話は広がるだろうが、実力を見られ

て上げるよりかは注目されないだろう。高々十歳の子供が実力であっと言う間に高ランク冒険者。噂はこの街では留まらないだろう。だったらアイリスの力で上がったと思われる方が楽になる。

これは思わぬ収穫だ……だが油断も出来ない。ギルドから誰かがつけてくる、なんて事もあるだろう。そんな時のためにもエリアサーチを強化しておく必要があるな。

最低でも敵意がある者、敵意がない者、味方、魔物の分け方くらいは可能にしたい。出来れば高低差、障害物の有無も。可能であるなら武具の判別も行いたい所だが……どうやって判別するかが問題だな……素材での判断は出来ないし……うぅむ。

「リーフー、早くー」

「ん？あぁ、ごめんごめん」

思考していて、シュレア達が既に席を立っていた事に気づかなかった。俺は慌てて立ち上がり、シュレア達に追いつく。

そして俺達はデリーヌの森へと向かった。

……あ、そういや武器……まぁいいか。そんないきなり金が手に入ってても怪しまれるしな。

１－８：アイリス（後書き）

人身売買はこちらでも違法。でもかいくぐる奴はいる。かいくぐろうとするなら勿論その分金もかかる。

２０１１／１０／０２
１－８：誤字を修正
ｈａｋｉさんありがとうございました

１―９：ランクアップのため（前書き）

う゛あー（；´д｀）

風邪がヤバい中更新です。２０００文字が消えたうえに風邪が重なり、３日間くらい一文字も書けませんでした。あー疲れた。

1―9：ランクアップのため

やってきましたデリーヌの森。リーム草の他、納品依頼の品と違う目的もある。

まずは魔物討伐、素材狩りだ。ゴブリンは活用出来る素材が全くといって良い程ないので、それ以外。

「メキアル草があるわね……採ってく？」

「頼む」

アイリスはそこら辺にある草から何かを見つけたらしく、それを採取している。

俺とシュレアが目的の品を採取、アイリスは複数の草を採取している。それはある目的があるからだ。

「……ここから正面十メートル先、何かが六体いる」

発動していたエリアサーチが反応を示した。木々のせいで視界が遮られているが、この先にいるのは確かである。

「六体……ゴブリンかアサシンウルフかもしれないわ」

「アサシンウルフか……」

知識では知っている。真っ黒な体毛で、夜に良く行動している。五から六体の集団を作り狩りをする　魔物だ。スピードはあまり速く

なく、それを補うための集団、真っ黒な体毛を持つ。
遠距離からの魔法で一気に潰すべきか。シュレアの出番はないが、まぁ効率的にやるならこれでいい。
「俺とアイリスの魔法で一気に潰す。もし取り逃がしがいたらシュレア、お前が追撃してくれ」
「うん、わかった」
遠距離から目視出来る程度まで近付く。そこに居たのはアサシンウルフだった。ゴブリンの死体に群がり、その肉を食べている。
「よし、狙うぞ……」
「疾きなる風よ、汝が鋭刃は我が元へと帰途すべし」
アイリスが構え、詠唱を開始する。
「フリーティングセヴァー」
「バーティカルエア」
俺の頭上から二刃の風が、そしてアイリスの横から風の刃が弧を描きながら魔物に向かう。俺の魔法が二体を切り刻み、アイリスの魔法が二体を切り、そして戻ってくるという法則を利用して残り二体を倒した。
その風の刃はアイリスの元へと返り、そしてアイリスの手に収まった。

フリーティングセヴァー……中級魔法。弧を描く風の刃を放つ。いってかえって来る上、返ってきた時はそのまま武器としても扱えるし、また投げる事も可能。鎌鼬が発生しているので相手に掴まれる事はなく、掴めるのは使い手のみだ。

……中級魔法。魔法には階級が存在する。下級、中級、上級、神級。下級は意識、想像が出来れば詠唱破棄は簡単。中級以上の場合詠唱しなくてはほぼ全ての人が使えない。上級なんて詠唱破棄した人は今までに一人しかいないらしい、その事について本で読んだが、魔物の軍勢が現れた時、その人物が腕を振るった瞬間凄まじい程の爆炎と、耳を劈く雷光が嘶いたという。

千を越える魔物は、その攻撃で九割方壊滅、残り一割も瀕死の傷を負ったものが多かったらしい。

神級などという階級が存在するが、今まで見た者はいないらしい。

んでま、アイリスは中級魔法を放つので、詠唱を使ったのだ。バーティカルエアは下級魔法である。まぁ、階級によって威力は変わってくるが、しかし魔法の使い手によっても威力は増減してしまう。詠唱と魔力さえあれば同じ威力の魔法が放てるわけではないのだ。

「殲滅完了。剥ぎ取るか」

アサシンウルフから剥ぎ取りを開始する。アサシンウルフの皮は保温性に優れており、また、色が黒いため潜伏には持って来いだ。ただ、傷付きやすいため長持ちはしない。

そしてアサシンウルフの爪を粉末にすると解毒薬の元になる。が、

酷く苦いらしく、飲めば2日間は舌に苦味が残るらしい。だからあまり人気がないようだ。

良薬口に苦しとは言うが、口に苦くない良薬が一番良いな。どうにかして苦味を無くす方法を模索したいな……開発出来れば売れるだろうし。

――――――――――――

「さてと……」

剥ぎ取り終え、探索を再開する。剥ぎ取れたのは皮6枚に爪72個。皮を外套にするなら丁度3つ分、解毒薬分は爪6個で1つだから……これで12個くらい出来るんじゃないかと思う。うーん……12個か……まだ足りないかもな。研究・開発するためには、そうだな……30は欲しい。

「すまないけど、もうちょっとアサシンウルフを狩ってもいいか？」

「うん、私はいいよ。戦闘したいし」

「構わないわ」

というわけで依頼の品を採取しながら魔物を倒す事に。

ざっと見ても３０個作るためには爪が１８０個必要、だがその他諸々を加えてみると、計２００個くらいは欲しい。１体から剥ぎ取れる爪は１２個なので……約１７体狩れば良い計算だ。今６体倒しているので、あと１１体倒せば良いだけだ。

こうして俺達は難なく魔物を狩り、依頼品も採取完了。何事もなくて良かったが、拍子抜け、といった感想も無きにしも非ず。凶悪な魔物と戦ってみたいものではあるが、街から近いこの森にはあまり居ないだろう。

―――――――――――――――――――――

「はーい、じゃあランクＦおめでとう！」

わー、ぱちぱちぱちぱち。

「……嬉しくないわけ？」

ギルドに戻り、納品依頼を熟し、そして漸くランクＦになれた。が、俺もシュレアも全く喜べない。だってランクＦだぜ？まだまだ先は長い。

「うー、なんかあたしがバカみたいじゃないのー」

「あはは……すみません」

一人はしゃいでいた事に頬を染めて恥ずかしがるカレンさん。表情がころころ変わる人だなぁと思う。カレン百面相！……というと怪盗っぽくなって微妙だけども。

「ランクFになると討伐依頼が増えてくるわ。まだやってないみたいだから言うけれど、討伐依頼は納品依頼より死亡する確率が高いわ、納品依頼なら魔物からは逃げれば良いけど、討伐依頼はその魔物を倒さなくちゃいけないからね。因みに討伐依頼完了の証明はその討伐した魔物の指定された部位を持ってくれば良いわ」

部位の指定は依頼主とギルド側が協議して決める。証明部位が決まっていると、既に持っているもので完了されてしまう可能性があるからだ。

「このまま依頼を受けるより明日以降に受けた方が良いわ」

既に陽も傾いている。このままランクFの依頼を受けようものなら、確実に夜にはなるだろう。夜は魔物の活動時間だ。わざわざこちらからリスクを負ってやる必要はない。

俺達は一旦宿に帰る事にした。

―――――――――――――――――――――

「うーむ……」

俺は宿の部屋で唸っていた。目の前には円形の魔法陣が展開されている。通常、魔法の発動時に魔法陣が見える場合と見えない場合がある。が、見える見えないはあるが、見えないタイプの魔法は見えるように出来る。その切り替えを行う事で視覚出来るようになり、術式の改造が可能となる。

そして現在俺はエリアサーチの改造を行っている。現状把握出来る範囲の限界距離は半径２０メートル。だが代わりに探知出来るのは相手の居る場所のみ。

それを改造し、現在では味方、敵意、魔物の反応の判別が出来るようになった。反応の判別は俺に対して与える感覚の差違で判別する事にした。

そして高低差の判別であるが、二通りに。まずは判別と同時に距離と、自分の位置と相手の位置の高低差を数値として判別する事に。ただこれだけだと位置情報をミスしやすい。そのため、マップとして手元に展開する方法も考える事にした。

マップとして展開出来るため、地形把握も楽で、距離も把握しやす

い。まだ見つかっていない時はマップを使用して判断する。戦闘中はもう一つの方法を使う。因みにマップでの表示の場合、探知は色で判別する。青が味方、敵意あるモノは赤、魔物は白で示される。

で、そこまでは順調にきたのだが……問題は武装の判別である。どうにか武装の判別をしたい所なのだが……ん？いや、別にこの魔法に全てを集約する必要はないのか。

確か……。

「ハイディングサーチャー」

そうして展開されるは光る目である。自分の片目の視界をそちらに移動する無属性魔法。自在に移動させ、そちらの様子を伺う事が出来る。見つかる可能性があるが、そこは仕方ないのかもしれない。

こいつは改造する必要はない……というか部分がない。探知魔法の改良点に関しては思いついた時にやっていけば良いだろうし。

次はっと……。

俺は異次元袋から、デリーヌの森で採取したものを取り出していく。

リーム草、メキアル草、アフリムの実、ティアキス花、アサシンウルフの爪。本で読んだ回復薬系統の素材のいくつか、だ。ただし割合とかわからないしどんな風に配合すれば良いかもわからない。

色々と研究・実験をしないといけないな。そのためにも実験器具が欲しい所。薬研（やげん）とか、土瓶とか……。デルシャさんの所で扱ってるかな？もしそうだったら……あぁ、俺が買ったら怪しまれるな。ア

イリスに買ってきて貰おう。……恩を売ったつもりが、逆に借りが出来てる気がする。

因みにこうして採取した素材たちはアイリスに頼んでいたやつである。俺とシュレアは依頼品を採取、アイリスは俺が使う素材の採取、としていたのだ。

ただ、デリーヌの森で手に入る素材は最低ランクの回復薬、【ポーション】にしかならない。もっと効果が高い回復薬は、その回復薬の素材プラス攻略難易度の高い場所で採れる素材を使わなくてはいけない場合が多い。

そうなると、売った場合コストも人件費もかかるから、それだけ高価になる。

……そのコストを削減して、他の回復薬よりも価格を下げれば、売れるんだろうな。もし高価や価格の差が他の回復薬と大きいなら新たな商品として、上澄吸収価格（スキミングプライス）でいけるだろう。

ぬふふ……色々としたい事が増えたぞ。色んな所に行かなきゃいけないな、こりゃ。

「リーフー」

「……おぉ、来たか」

扉越しに声がか掛かった。シュレア達が帰ってきたみたいだ。扉を開けると、そこにはシュレアとアイリスが居た。

「完成したよ」

シュレアは笑顔でそう言いながら、異次元袋から黒い物を取り出した。広げてみるとそれは黒い外套だった。アサシンウルフの皮から作られた外套であり、シュレアとアイリスに服屋に行って仕立ててくるよう頼んでおいたのだ。毛は立ってないが、きちんと織り込まれていて多少丈夫そうに見える。

「余りの皮も渡したら確かに無料で作ってくれたよ」

予想通りである。ただ、無料ではあるが実際にはこちらがマイナスだろう。

「アイリスは外套の価格と、アサシンウルフの皮の売却価格わかるか？」

「えぇ。外套の価格は銅貨６０枚。皮は大人のアサシンウルフ１枚で銅貨１０枚。良質なのもあったけど傷付いてるのもあったから、１７枚で、売れば銅貨２００枚くらいにはなったんじゃないかしら？」

外套は２枚ある、アイリスは自分自身のが既にあるらしいから。だから合計金額は銅貨１２０枚だが、金は貰ってない。となると……。

「アイリス、わかってて言わなかったのか」

「其の通りよ」

さらっと答えやがった……まぁ間違ってはいない。まだここにはいる予定だし、その間に服屋の方と懇意になっておくのは良い事だろうとは思う、長期的に見れば。ただ、服屋と懇意にして、利益があ

るのかどうか。利益があっても貢いだ分回収出来るとは思えないんだがな……。

「勿論、適正価格がわかってる事は向こうが知ってるわ。この街には少しばかり居るしね、そこら辺の商店なら全部顔見知りよ」

足元見られたわけでもないってか。オーケーオーケー。流石アイリスだな、俺達よりもここに居る期間が長いだけある。

「じゃあデルシャさんって知ってるの？」

「勿論知ってるわ。あそこの道具は質が安定してるから。ただ、偶にしか開いてないのよね」

と溜め息を吐くアイリス。

「因みに俺達とデルシャさんは知り合いだ」

「あら、そうなの。どういった知り合いか聞いても良いかしら」

「私達エーデルって所出身なんだけどね？デルシャさんもそこに住んでるんだー。でね、エーデルでもお店やってて交易もやってるの」

「あぁ、だからこっちには偶にしか居ないのね、納得。んー……だとしたら……」

「あの人はまけてくれないぞ」

デルシャさんはそこら辺しっかりしてる人だからな。俺達相手だって関係なく適正価格で売るだろう。そっちの方が有り難いけどな、

良い経験になるし、安い価格に慣れてしまって頼り切ったりしたくない。

「あら、残念」

そう言うアイリスだったが、別段残念がってはいないようだ。そういう人物だっていうのを本人もある程度思っていたんだろう。商売に公私無し。だからこそ正当な価格で売ってくれるという信頼感が生まれる。

意外な接点だと思ったが、よくよく考えてみるとこの街にいるんだから当然か。今度、デルシャさんのお店にお邪魔しよう、どんな品揃えか気になるし。

１―９：ランクアップのため（後書き）

スキミングプライス……いわゆる新商品の価格自由度です。新商品には適正価格というものがないので、真新しさに客は買っていきます。なので多少高めに設定し、早期にかかった資金を回収する事が可能になる、という事です。

２０１１／１０／０２
１―９：同時な距離→同時に距離、に修正
見方→味方、に修正
爪の苦みについて文章を多少修正。意味合いは変わらないが、くどくないようにしました。
ｈａｋｉさん、ありがとうございました

1―10：ルイ湖林

やけに外が騒々しく、朝早くから目覚めてしまった。窓から外を見ると、何故か甲冑を着た連中が居る。白い甲冑で、手にはハルバードが握られているが……この様子からしてどこかの騎士のようだ。

様子を見るために一旦宿の外に出る。騎士連中は街の中央通りを歩き、街奥に構える領主の家に向かっている。国のお偉いさんでも来るのだろうか。

眺めていると、俺と同じようにその様子を眺める街の人や冒険者達。別に頭を下げる必要はないのか？

疑問を抱いていると、馬蹄が地を蹴る音が聞こえ始めた。そちらの方を見ると、馬に乗った騎士が数名と、馬車があった。馬に乗っている騎士は歩いている騎士と、鎧が違う。それぞれ色にも微妙な差があったり、形状が違ったり。

「おや、早いね」

「ん？あ、おはようございます」

ボーレルさんが声をかけてきた。彼女も様子を見に来たらしく、騎士達の列を眺める。

「朝早い到着だねぇ……」

「ボーレルさん、あれは……？」

「あぁ、今日は国のお偉いさんがここに来る予定だったんだよ。十日前から通達があってねぇ……でも早いね。人通りを邪魔しないためかね」

通達があるのか？普通こういうのって領主以外には知らせちゃいけないんじゃ……お偉いさんって言うからには重要人物だし、暗殺される可能性が増えるんじゃ……。

「狙われる可能性を考えてるのかい？まぁそうだねぇ。でも、お付きの騎士様が途轍もなく強いといわれていてね、噂によれば今まで暗殺者に狙われた事はないとか」

「強い、ですか……」

寧ろ強いからこその暗殺だと思うんだが……いや、何らかの感知をするのだろうか、俺のエリアサーチみたいに。騎士か……未知の存在だな。エーデルでは一切見かけた事ないし。

「それで、どんな方が乗っておられるんですか？」

「ゼルプスト・メル・グピティー様だよ、どんな仕事をしてるかは詳しくは知らないけど。この辺りの視察らしいね。最近北にあるグルデ山の魔物が活性化しているとかで」

「危険な所を自ら視察、ですか」

「あぁ、周りの騎士様もだけど、グピティー様自身もかなりの魔導師らしくてね。今までも活性化の際は自ら赴いてくれるのさ」

周りのあの騎士連中だけでなくその人自身も魔法が使えるのか……

いや使えるだけなら良いが、魔物の活性化中でも対応出来るなら実戦レベル、しかもかなりの実力なのか？騎士は強いのだろうから、そこまで実力が必要ではないだろうけど……。

「そういえば、騎士様も魔法が使えるんですね」

「近衛騎士様達だけらしいけどね。普通の騎士様は使えないよ。そういう魔法にも武術にも長けた人徳ある人のみが近衛騎士になれるらしいよ」

近衛騎士って事は……王直属の騎士？そんな連中派遣しても良いのか。それともそれだけ国の守りが堅いという事の裏返しなのだろうか。

……どうやら全隊が通り過ぎたみたいだ。

「さてと、あたしも朝ご飯作らないとねぇ」

ボーレルさんが宿の中へと戻っていった。俺はどうしようか……ついていって……みねぇよ。気付かれたりしたらどうすんだって感じだ。確かに気にはなるんだけども。リスクを背負ってまで、する価値はないな。

しかし騎士の魔法ね……。一体どんな魔法を使うのやら。一般人でも習得可能なのか、それとも騎士限定なのか。そして俺にとって有用なのか。それ如何によってはリスクを負ってでも習得しにいくかもしれん、まぁ、どう習得するのかすらわからないけども。

今は我慢してランクアップと金稼ぎだな。

―――――――――――――――――――――

「はい、では今回はこの依頼だね」

ギルドに行き、討伐依頼を受ける事に。行く場所はデリーヌの森ではなく、東にいった場所にあるルイ湖林と呼ばれる場所。デリーヌの森のような木々だけでなく、奥には湖があり、魔物達の住処があるようだ。因みに湖の中にも植物が生えていて、それが湖林と呼ばれる所以だそうな。

そのルイ湖林にいる魔物、コボルトを倒す。コボルトとは小柄で犬のような顔をした人型の魔物。ゴブリンのように集団で生きており、木を荒削りした武器を使う。強さもゴブリンと同程度らしい。

そのコボルトが多数発生し、数を減らすために依頼が出された。高々コボルト、らしいのでランクＦでも受けられる。減らす数は１０体。

ルイ湖林の水はとても清らかで、回復薬の素材には持ってこいだろう。草のエキスを抽出した液体とか使う可能性は高いし。というわ

けで水を入れるための麻袋も６袋用意した。
良く使用されるためか道は踏み固められており、湖までの道は楽そうだ。
エリアサーチを展開しながら湖へと向かう。
コボルトから取れる有用な素材はない。そのためちゃっちゃか殺して証明部位だけを取ろう。証明部位は鼻。
「わぁ……」
林中央部にある湖に到着。シュレアが、その美しさに思わず声をあげた。
湖の周囲には木々がない。上から射す陽の光を全面に受けた湖は、きらきらと輝いているように見える。空のように澄んだ青き湖内の木々が、まるで日光浴でも楽しむかのように群生していた。
これは来るだけでも十分だな。なんというか、心が洗われるというか、癒されるというか。魔物の住処になるのも頷ける。
あまり自然を破壊しない程度に採取しよう。これが見れなくなるのは嫌だし。
……日本にもこういう自然があって、それが人の手によって失われる。皮肉なようだが、人の手がつかない物程美しいっていうのは、こういう事なんだろうな。
「リフ？どうしたの？」

「ん、あぁいや、なんでもない。俺もちょっとこの景色に見とれてただけ」

「ねー、綺麗だよね」

シュレアの楽しそうな表情に頬が緩むのがわかる。シュレアのお陰で何度癒された事か。

「……居るな」

と、思考していた所でエリアサーチが反応を示した。反応は魔物、距離はジャスト２０メートル。木々の間に居るようで、ここからじゃ視認出来ないが、距離はどんどん縮んでいるため、こちらに近付いているようだ。数は３体か。

「一旦隠れよう」

背後の木々の後ろに隠れ、マップを展開する。地形は平坦であるから直線的攻撃で問題はない。

「ハイディングサーチャー」

右目の視界を魔法に移す。それを上空から敵の頭上まで動かす。犬のような顔をした小柄な人型。コボルトだった。

「……しっかしバカみたいな魔力ね」

「……ん？そうか？」

アイリスから呆れたような声が聞こえた。

「普通エリアサーチを常時展開、しかも同時にハイディングサーチャーなんて芸当出来ないわ。ましてやなんか改造してるし」

あまり気にした事はなかったが、そういうものなのか。そこら辺も気をつけないといけないな、迂闊だった。

「あまりバレないように気をつけるか」

「それが良いわね」

そう言いつつ、俺達は視線を外さない。俺のハイディングサーチャーはコボルトの位置を捉え、展開されているマップの表示により場所も距離も特定している。

……また魔法で殲滅するか？それが一番効率的だが……。いや、それで良いのだろう。わざわざ近接で挑んでやる必要はない。

「シュレア、悪いけど今回も出番ないかもしれない」

「……えー」

「いや、ごめん。謝るからそんなに落ち込まないでください。でも死んだりケガする確率を減らすにはこれが一番なんですよ、わかってください」

本当に落ち込んでいるシュレアの頭を撫でる。

「うー……でも一番良い方法なんだよね？……納得する！」

シュレアは俺に笑顔を向けた。うーん、無理矢理だったから、悪いなぁ……あ、そうだ。良い事思いついた。でも今言う事じゃないか。

「アイリス、また魔法で殲滅するぞ」

「了解」

―――――――――――――――

「シュレア、今日は大事な話がある」

「？」

ランクＦの依頼を四つ程熟した翌日。俺達はルイ湖林に来ていた。納品依頼を受けてきたので無駄ではない。

「魔法について、だ」

「魔法？」

「あぁ。シュレアが今使える魔法は身体強化のみ。俺とアイリスは遠距離魔法が使える。魔法を覚えればそれだけ有利に戦えるんだ。俺とシュレアの二人旅だったら近接に集中して貰うために言わなかったが、アイリスが仲間になったからな。魔法が主力になる、だから……」

「……」

「……シュレアにも魔法を覚えて貰う」

昨日考えていたのはこの事だ。三人パーティで戦っていたが全て魔法で片付いていた。シュレアの力が余り過ぎている。それをどうにかしたかったから、魔法を勧める事にした。

今までは俺が後衛、シュレアが前衛として戦っていたが、アイリスが加わった事で攻撃力が格段に増え、魔法で殲滅出来る可能性が増えた。こうなるとシュレアの鬱憤が溜まり、力が余ってしまう。そのせいで後々なんらかの被害が出てしまうのは避けたい。それに魔法を覚えればそれだけ戦闘の幅が広がる。

「アイリス、シュレアに魔法を教えてやってくれ。その間に俺が依頼を熟すから」

「教えるのはあまり得意じゃないんだけど……まぁいっか」

「私が魔法か……出来るかな」

「出来るさ、シュレアなら」

不安そうなシュレアの頭を撫でる。するとほんのり頬に赤みを帯びながら笑顔で頷いた。

――――――――――――――――

それから数日後……。

俺達はランクEになっていた。一人で依頼を熟すのは中々に時間がかかるものだ。シュレアも同時に受けてはいるのだが、専ら魔法の訓練。一人だと一日三つやれれば良い方かも。討伐依頼もそうだが、納品依頼でも見つけるのに中々苦労する。

あぁ、そうそう。現在シュレアは――――

「其は悠久の贄となりて劫墓（きょうぼ）の末席へと誘われよう」

「グレイブブレイザー！」

目の前の魔物、コボルト三匹を囲うように火の線が地に円を描き、そこから火の柱が立ち上がり、コボルト達を全方位から包み込み、焼き尽くした。

シュレアの魔法習得は、順調だった。得意な属性は炎と土。先程の魔法は中級魔法。この数日で最低限の魔法の知識と得意属性を把握し、みっちりと叩き込んだらしい。最終的にはアイリス先生と呼んでいた（アイリスは結構嫌がったらしいが、呼ばれだしてからは気恥ずかしさを感じながらも嬉しかったみたい）。

アイリスの得意属性は風と水と炎らしい。エルフなのでほぼ全ての属性を操れるらしいが、その中でも得意なのがその三つ。で、シュレアに教えるには相性が良かった。尚、シュレアは炎属性を中心にして教えて貰っており、土属性は少しばかり初級魔法を覚えた程度のようだ。

「ふー……」

「お疲れ。大分慣れてきたわね」

「あ、はい、先生！」

「あー、うん……その先生っていうのと敬語、もう止めて良いから」

「え、でも先生」

「正直に言うね、恥ずかしいからやめて」

「えー」

「えーじゃない！先生命令！」

「はーい先生ぇー」

「くっ……！」

どうやら恥ずかしさのが勝っていたようである。多少ではあるが、アイリスの慌てる姿は新鮮だ。にやにやしているシュレアとたじろぐアイリス。完全に押し負けてる。

こうやって関わっている内に女子二人は結構仲が良くなったみたい。良かった良かった。親しい友人が俺くらいしかいなかったしな、こうして同性の友達が出来るのは良い事。

……俺？同性の友人？知らんがな。

ドレイクさんとは話の感じが合うし年齢を超えた友情でも生まれるんじゃないか？うん。いや正直どうでも良いんだけどさ。どうでも、良いんだけどさ……くすん。

「どうしたの？リフ」

「……いいや、なんでも。自分が多少、多少！ずれた人間だと再確認しただけだから……」

「多少？」

おいそこのエルフ、俺の心に剣を刺すんじゃない。痛いじゃないか。

「……あ、リフ。そういえば武器はどうするの？」

「あぁ、今日買いに行こうと思う。日にち的にまだ危ない可能性はあるが、アイリスが居るからな」

「今の武器は結構使っているみたいだし、それが良いわね」

武器のストックはあるが、それでも控え。メインとなる武器は数本持っておきたいのだが、現状では心許ないものばかり。これでももった方だろう。

「じゃあ、依頼達成した後武具屋に行くか」

「賛成！」

嬉しそうにはしゃぐシュレア。あれ、女の子ってそれで喜んで良いのか？もっとアクセサリーとか服で喜ぶものなんじゃ……。いやまぁ、シュレアだしそういうのに余り興味がないのは知ってるんだが……。

多少心配になりながらも、それがシュレアなのだと勝手に納得しながら、俺達はルフェスへと戻った。

１―１１：白き謎

「なんだあれ……」

ルフェスに辿り着いた時、街入り口に数名の騎士が集まっているのが見えた。一人は甲冑の色が違う、近衛騎士のようだ。隠れて様子を伺いながら聞き耳をたてる。

『あの方はまた居なくなったのか……』

『でもしゃーないっすよ。あの人止められる人なんていませんって』

『しかしだな、これではいくら騎士が居ても意味がないではないか。……はぁ……私達の身にもなって欲しいものだ……』

『ご愁傷様っす』

『まぁまぁルフタイン隊長。あの方は猫だとでも思いましょう。縛ろうと思えば縛ろう思う程華麗に逃げるものです』

『猫で済めば良いのだがな』

『デルクスパルドくらいあるんじゃないっすかね』

『言えてるかもしれん』

笑いが起こるが近衛騎士自身はうなだれている。仲が良いのか知らないが随分と口調が柔らかい。それに……誰かが居なくなった？にしては余り慌てている様子は見受けられない。奔放な性格の人物、

なのか。
騎士達はそのまま街の中へと戻っていった。
あの騎士が言うからには……あの……うんちゃらかんちゃらグピティー、だっけ？その人が居なくなったのかもしれないな。近衛騎士が『あの方』と言うくらいだし。
「あれは……」
「騎士様？」
「あぁ、そういや二人は知らなかったな。あれは騎士で、数日前に来たらしい。近場に魔物が活性化した場所があるみたいでそこの視察とか」
「あぁ、あの人ね……。でも……」
「でも？」
「今まであの人が居なくなったっていうのは聞いた事ないわ。温和な人物らしいし、騎士に迷惑をかけるような行動をする人だとは思えないけど……」
「あの人の事知ってるのか？」
「ギルドの職員から聞いた話よ。偶にギルドに赴くらしくてね、それで前にあの人が来た時に職員から教えて貰ったのよ」
「ふーん……」

温和ねぇ……そんな人物が居なくなるもんか？しかも騎士は『また』って言ってたな。誘拐の線も考えられる筈なのに全く選択肢に入れてない様子だったし。

「つまり……」

「別の人がいる、って事ね」

頷く。可能性としては、あの時通った馬車にもう一人乗っていたのかもしれない。

「まぁいつもの事みたいに話していたし、気にする必要はなさそうね。戻りましょう」

俺達はルフェスの街へと戻った。

―――――――――――――――

「はい、じゃあこれで」

「ほい、まいど」

俺達は武具屋に赴き、武具を購入した。

ねんがんの　じゅうを　てにいれたぞ！

「おぉー」

画像とかでしか見たことがなかったが、これが銃か。ずっしりしていて、その無骨な外見からは秘めたる強さを感じさせる。魔力を籠めると弾丸を放つこのアサルトライフル、ヴァイパー。冷静に考えてみれば使うタイミングはそこまでないが、乱戦になった時は魔法よりも役に立つだろう。

そしてこのハーフアンドハーフソード。中々に重い武器だが、身体強化するとしっくりくる。耐久性も前とは段違いなので、長持ちするだろう。

うん、良いな、武器を新調するっていうのは。ゲームでも新しい街に行った時に真っ先に武具屋に行くし。どんな武具があるのか、ワクワクするんだよなー。

シュレアも新しい武器、シュヴァイツァーサーベル二本を抜き、その身を見ては嬉しそうにしている。

「そこまで喜んで貰えるたぁ、ドレイクさんも鼻が高いだろうよ」

「この武器を造っているのはドレイクさんなの？」

「あぁそうだぜ。あの人の造る武器は評判が良くてな。ドレイクさんは鋳造は一切せず全て鍛造。だから納品される武器の数は少ないんだ。でも色んな街の武具屋から注文があるらしいぜ」

そんなに凄い人なのか。コストの面から見ると違う街まで仕入れに行くっていうのは結構な金額を上乗せしなくちゃいけない。それだけ人気があって、でも売れるっていうのはかなり質が良いってことだ。

鍛造って事は一つ一つ手造りなんだから、かなり金額がかかっても仕方ない筈だが……？

その疑問をダイムさんにぶつける。

「いや、それがよ。金額は鋳造されたその他の武具よりちょっと高い程度なんだよ。どうやってそれを可能にしてるのかは知らんし、俺達武具屋にとっちゃ仕入れ値が安いのは有り難いからな、別段気にもしてない」

ちょっと高い程度……じゃあドレイクさんは金を稼ぐ事に対して余り執着がない、って事なんだろうか。だとすると凄い職人魂だ。この武器も大事にしてやらないとな……。

「ダイムさんは他の素材の武器は売ってないの？」

「鋼以外は重鋼、羽鋼は扱ってるぜ。ただそれ以上の物となると滅茶苦茶高くなるうえ、この辺りにゃあまり強ぇ魔物は居ねえんだ。何よりドレイクさんは鋼種以上を扱おうとはしねぇんだよ。理由はわからねぇけどな」

扱わない……？技術がない、のか？それともそれで十分って事なんだろうか。

「しかしなぁ。この街にはドレイクさん以外鍛冶師いねぇし、他の街の鍛冶屋から仕入れようとも割に合わねぇんだよ。この辺りにはランクの高い冒険者はあまりいない。良い素材を使った武具を売ろうにも全然売れねぇ。それで一回大損しちまってなぁ……俺としても鋼種以外は扱いたくねぇんだよ」

確かにこの近辺ではそこまで強い魔物は居ない。耐久性だけを考えれば確かにより良い素材の武具が良いかもしれないが、値段を加味するとそうもいかない。鋼武器二つを買った方が良い場合があるし。

「まぁこれ以上の武具が欲しいなら違う街しかねぇってわけだ。……あ、そういや次は防具だったな。今回は結構買ってくれたしあの武器も売れたしな。整備は念入りにしといたぜ」

「ありがとう」

ブレストプレートとガントレット、フットガードを貰う。軽装だが、あまりガチャガチャしてると体の動きを阻害する。

「まぁ合理的っちゃ合理的な装備だな。お前らくらいの年齢なら防御よりも回避だろう。急所を守る最低限の防具だけを装備してた方が動きやすいしな」

「うん……そういや。このルフェスから一番近い街ってどこ？」

「一番近いってーと、ルイ湖林を越えた先にあるベルベリアだな。馬車でも二日かかるが」

「ベルベリアは王都に近い？」

「近くはないが、ルフェスよりは近いぜ。王都グレアリーズはあっちだからな」

王都グレアリーズか……。

「あ、そうだ。アルビオンはどっちにあるの？」

「アルビオンか。こっから北だぜ。アルオスを抜けて、またその先の街、サドンルイマを北に行って、国境を超えて更に北。馬車で行くんなら最低でも１３日は掛かる。その他諸々を加えると、１５日はかかると思っていい」

遠いな……まぁ他国に当たるわけだし当然ちゃ当然か。

この世界には交通手段が少ない。徒歩か馬車。で、とある国ではワイバーンと呼ばれる翼竜に乗って移動する連中もいると本に書いてあった。竜を駆って戦う奴もいるんだろうか。

違う交通手段が欲しいな……出来れば生物を使わない乗り物とかさ。物である以上、替えが効く物でないとリスクが高い。機械文明が発達してれば、バイクとかあったんだろうけど……。

「ん？どうしたんだ？」

「え？あぁいや、なんでもない。じゃあ、帰るよ」

「おう、毎度あり」

あまり長居するのも悪いので、俺たちは一旦戻る事にした。

「……どっちに行くか、迷ってるの？」

俺が思考しながら歩いている事に気付いたシュレアが話しかけてきた。

「其の通り。グレアリーズにするかアルビオンにするか……」

「何故その二択なの？」

「北のアルオスって所で奴隷云々の問題があると聞いてな」

「……あぁ、私もあの盗賊が話しているのを聞いたわ。でもそれをどうにかする気？」

「どうにかしたいのは山々なんだがな。自分で解決しようにも、ただ単に連中を倒す、ってだけじゃ終わらない。グレアリーズ国に頼みたいとは思うが、証拠がな……」

「利益も得られて奴隷も無くせる方法があるわ」

「ん？それはどういう……」

「前に言ったと思うけど、アルビオンのレクセス王は奴隷制度を無くした張本人。その彼が動かないとは思えないわ」

「証拠がないぞ」

「そうね、それに国が違うのだから解決するのも簡単じゃない。でも、それで動かない人物でもないと私は思う。それに彼はエルフの言葉は信じてくれるわ」

「随分と信頼してるんだな」

「それなりの実績があるからね。それに一応知り合いではあるし」

……ん？

「王様と……知り合い？」

「えぇそうよ。まぁ知り合いと言っても本当にお互い顔を知っている程度なの」

これまた凄い関係だなおい……。

「信用していいのか？」

「それはあなたの自由よ」

お互い見つめ合いながら無言の時間が過ぎる。俺は根負けし、ため息を吐いた。

「……じゃ、目的地はアルビオンだな。剣の事もあるし……あぁ、それだけじゃない。銃についても聞きたいし」

「アルビオンなら、良い武器あるかな？」

「多分な。ミスリルとかもあるんじゃないか？」

「ミスリルかぁ……振ってみたいなー」

「私の武器、ミスリル製よ？」

「うー……そうじゃなくて、自分の武器として使いたいんだよ」

確かに他人の物よりも自分の物の方が良いな。それに、アイリスがミスリル製の武器を持っているから、シュレアも余計に欲しくなったんだろうな。シュレアも魔法を使えるようになったし、ミスリル製の武器は非常に有用だ。向こうに着いたらシュレアの武器を最優先で買ってやろう。

アルビオンか……行くためにはアルオスを通らなくてはならないようだが、奴隷に関しては密やかに行われていた犯罪だ。表立っての事はしないだろう。ただ狙われる可能性は大いにある。まぁ、もし仕掛けてきたら容赦はしないがな。

「具体的にいつ頃行くの？」

「うーん……出来ればランクCくらいだな。別にそこまで上げる必要もないんだが、ここならそのランク程度までの依頼はあるだろう。向こうに着いてランクD以下の依頼がないとか少ないだったら一気に効率が落ちるし」

まぁ依頼がない、なんて事はないと思う。

ランク上げ……それ自体は俺に与える利益は微々たるもの。が、利益を与える物の要素にはなるのだ。ランクが高ければ高い程、効果は高くなるんだ。何事も先を見据えなきゃな……。

「じゃあリフエルとシュレアがランクCになったらって事で」

話は一旦そこで終わる。

「なぁアイリス。質問なんだが、デルシャさんとこの道具屋には薬研って売ってる？」

「やげん？なにそれ」

あぁ、知らないのね。なら仕方ない、か。自分で行ってみよう。

……って、そういやもうデルシャさん居ないんじゃなかったか？6日で帰る、みたいな事言ってたし。今は言われた日から7日経ってるし……まぁ仕方ないな。

……あ。良い事思いついたぞ。

「すまんが二人は先に戻っててくれ。俺はちょっとドレイクさんの所に行ってくる」

「私達は先に帰れば良いの？」

「あぁ。金は……まぁこんくらいあれば十分か。二人はこれで食べ

歩きでもしとくと良い」

銀貨を3枚程渡す。

「ホント！？やったぁ！」

「あら、私も良いの？」

「あぁ、というか愚問だな」

「……そう。なら遠慮なく。さ、シュレア、行くわよ。私が美味しい物教えてあげる」

「やった！期待してるね！」

俺の返答に対して一瞬柔らかな笑みを浮かべたかと思うと、二人は嬉しそうに出掛けていった。なんというか、友達というより、あれじゃあ姉妹だな。

さて、と……。俺は鍛冶屋に向かうとしますかね。

―――――――――――――

「……ん？あぁ、お前さんか。何か用か？」

俺は鍛冶屋を訪れていた。カウンターで、何やら小さな、かなり濁っている紫色のインゴットを眺めている。だが、俺を見かけるとそれをすぐに隠した。どうやら少し事情があるみたいだし、追及はしない方が良いだろう。

「少し聞きたい事がありましてね。ドレイクさんは薬研をご存知で？」

「あぁ、勿論」

流石鍛冶屋だな。

「じゃあその薬研を造っていただきたいんです」

「……ふむ。素材は？その素材は持ってるのか？」

「勿論……と言いたい所ですが、鋼の武器しかありません。まずそれをインゴットにしていただきたい」

「わかった。その武器を出してみろ」
鋼の武器を取り出す。それを見た時、ドレイクさんは目を見開いた。
「これだけの数を……まぁいい。インゴットには出来ない部分もあるが……インゴットにするには明後日まで掛かるな。それでも良いか？」
どうやってこれらを入手したかは一切問わないみたいだ。ドレイクさんは何かとこちらの様子を読む事に長けてるな、ありがたい。
「勿論。では明後日の今頃に」
「あぁ……。……さっきの、聞かないんだな」
「聞いて欲しいんで？」
「いいや」
「……では、また」
お互い、追及して欲しくない事には口を挟まない。商売の関係であって、親しき仲ではない。この関係が一番楽な関係だな。
……まぁ、聞きたくなかった、と言えば嘘になる。さっきの紫色のインゴットだけではない。ダイムさんが話していた、鍛造に関する話も、だ。
「あのー……」

「うん？」

思考しながら道を歩いていると、可愛らしい声が、俺の行く手を阻んだ。フード付きの真っ白なローブを着た小柄な女の子。深くフードを被っているため、顔は見えない。身長的に俺と同じくらいか？

「何か用？」

「あのね、この辺りで騎士を見なかった？」

「いや、見てないよ」

「そっか。ならい――――」

「あ、居ました！」

遠くで鎧を着た騎士がこちらを見て叫ぶと、その近場の騎士達が一斉にこちらを見た。

「やっぱ……逃げよう！」

「……え？」

あれ、なんか腕引っ張られてるんですけど。なんかフワッと体が浮いたんですけど。俺の視界が横になったんですけど！

「おい！俺を巻き込むな！」

「きーこーえーてーるー！」

凄い速さで走るフードの少女が楽しそうに言った。……って聞こえてるのかよ！なら離せよ！

力を込めるがビクともしない。どういう事だ、身体強化が効かない？

「私に付いて来るなら、なんで効かないか教えてあげるよー！」

「……」

「むー、肯定しないのー！？じゃあ銀貨5枚あげるよー！」

いや、金で釣るなよ。

「……あぁもういいや。離せ、自分で走る」

「頼むよー！腕疲れたしー！」

というかうるさいんだよこの子。凄い叫ぶから耳がキーンとして痛い。

手放された俺はその少女の速さについていける程度に身体強化を行い、共に走る。

「ヒャッフー！風があたしを呼んでるぜえええええ！」

だから五月蝿いんだよおおおおおおお！

「いやー、随分逃げたねーこりゃ参った」

「……」

溜め息を吐く俺。俺達は街外れのボロ小屋に逃げ込んでいた。ここにはいくつか新品の道具などが置いてあって、生活感こそ無いものの、活用はされているみたいだ。

「おやー？少年、声がないぞー？」

「……」

誰のせいだと。ちょっと殴りたい感情に駆られるが我慢我慢。

「ところで、なんで俺をここまで連れてきたの？」

「別に口調直さなくてもいいんだよー、あたしは気にしない」

「……あー、わかったわかった」

「ん、よしよし。で、なんで君をここに連れてきたか……その答えは！」

「……」

「……特にないんだなー、これが」

いやぁ参った参ったと言い、笑いながら自分の頭をさする少女。ああ、なんか凄い、こいつと関わると面倒な事しか起きなさそうな気がしてならない。俺の頭が退避命令を出してる。

「因みにあたしの名前はサーシャだよん」

「俺の名前はアズキ・ダイフク」

「……変な名前」

「良く言われる」

なんかパッと思い浮かんだ偽名、小豆大福。なんで思い浮かんだのか自分でもわからん。ただ、面倒事に巻き込まれたくないので、偽名を使っておく。

「で、さっき身体強化が効かなかった理由は？」

「うむ、教えてしんぜよう。実は魔導具の力なのだ」

えへん！と無い胸を張りながら、腕を前に出して袖を捲った。そこには赤い宝石が埋め込まれた金色の腕輪があった。装飾・彫りも美しく、高価な品だと思わせる造りだ。

そして、魔導具……所謂魔法の力が込められた道具の事。これさえあれば魔力が少なく魔法が扱えない人でも、それなりの魔法が、有限ではあるが使えるようになる。しかし、勿論高価、多分金貨が数千枚、数万枚飛ぶってくらいの金額にはなるんじゃなかろうか。

「そんな高価な物見せて良いの？」

「んふ、まぁねぃ。理由があるわけよ、理由が」

奪われない自信がある理由ってか。相当な自信なのか、俺に腕輪を見せびらかしてくる、うん、ウザい。

「そろそろ帰っていい？」

「ぬ？あぁ、うん。因みに帰り道はここを出て右に行った後あと、そこの曲がり道を左に行けば戻れるよ」

「わかった。じゃ、また機会があれば」

まぁ出来れば会いたくないわけだが。

「おうおう。んじゃあのー」

ぶんぶんと手を振る少女。随分とテンションの高い女だな……と俺は溜め息を吐きながら、宿へと帰った。

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ『？？？』

「……思ったより平凡な子だね」

『そうですね』

ボロい小屋の中、白いローブを纏った少女が独り言のように呟くと、

それに答える声が少女の脳に直接語りかけた。

「でも警戒心はそれなり。逃げる、若しくは倒す自信がある」

『貴女を倒す、などという事は不可能かと』

絶対の信頼をおいているその言葉を聞き、だが少女は首を横に振った。

「世の中絶対なんて物はないんだよ、絶対にね」

『……』

「矛盾してると思う？確かに聞くだけならそうかもしれないね。でも実際そうなんだから仕方がない」

少女がフードを取る。そこから現れた長く美しい銀色の髪が棚引いた。

『……で、その口調と姿、何時までやるんですか？』

「……もう、解除しても構いませんよ」

『御意』

少女の回りに氷の粒が漂い、少女を包み込む。それが全てを覆い尽くした時、氷は砕け、塵となり空気中に溶け込んでいく。

中から現れたのはリフエルよりも背の高い女。あどけなさが見えるが、同時に将来の妖艶さの片鱗も窺わせる。

「個人的にはあの口調も中々良かったのですが……」

『似合わなすぎて吹き出しそうでした』

「正直な感想ありがとう。食事抜きにしますね」

『……！？』

「うふふ、冗談ですよ」

口元を手で隠しながら上品に笑う。その動作はまるで流れのように自然を行われており、慣れていた。

「そろそろ帰りましょうか。皆さん心配しておられるでしょうし」

『心配……してますかね？』

「……」

その呟きに、少女も心当たりがあるようで、何も返せなかった。

「もししていなければ……」

『していなければ？』

「……うふふ」

『……』

怪しげな笑みに、声の主は反応を示す事が出来なかった。

（……ではまた、次の機会に会いましょう……リフエル・デリンディアさん）

１－１１：白き謎（後書き）

矛盾がないか非常に心配です

1―12：ハール・レクリシア

ランクDになった。

……なんか、感動もないや。特に事件もなく、納品依頼も討伐依頼も難無くクリア。拍子抜け、と言って良いかもしれない。

あれ以降、あの面倒臭い少女も見ないし、騎士連中もグルデ山の鎮静化され、落ち着きを取り戻した事を確認すると、帰って行ったらしい。

あぁいうフラグっていうのは大抵引っ掛かるものだと思ってたが、そんな事はなかった。それとも、主人公が居るのかね。

「余所見すんなぁ！」

「ん」

鋭い横薙ぎをしゃがんで回避し、距離を取る。

現在シュレアと戦闘中。俺はハーフアンドハーフソードを持ち、シュレアは二本のシュヴァイツァーサーベルを使っている。今、新しい武器の感覚を得ようとしているのだ。因みに俺は武装魔法以外の攻撃魔法禁止の所謂縛り状態。シュレアには魔法が加わっているので、攻撃のバリエーションは増えたみたいだ。

「ブレイズショット！」

詠唱破棄された炎の弾丸が飛来する。軽く避けると、そのタイミン

グを狙ってかシュレアが近接を仕掛けてくる。
剣での一薙ぎが迫る。
「ディバイディングボルト」
「っ！？」
俺の呟きに反応したシュレアが無理矢理体を捩り、攻撃を中断、俺から距離を取った。
「よーし今回は反応出来たみたいだな、上出来上出来」
「……」
「腰痛い？」
コクンと頷くシュレア。それはそうだろう、本来ならばやってはいけない行動を無理矢理起こしたのだ、体にかなりの負担がかかるのは誰でもわかる。……この年齢から腰痛、とかにはならないよな？
因みにディバイディングボルト、武装魔法の一つで雷属性。武器に電気を纏い、その武器が命中した相手に一定の麻痺効果を与える。防御にも攻撃にも牽制にも使える非常に便利な魔法だ。
「猛る焔、其は蠢動する隷蛇となりて仇なす者を焼き尽くせ」
「プロミネンスバイト」
シュレアの足元に魔法陣が展開され、そこから蛇の形状をした炎が

いくつも飛びでて、俺へと向かってくる。

あれは当たった部分を焼く、炎属性の中級魔法。結構追尾してくる魔法らしく、相手の動きを制限する場合でも使える。どうやら俺の行動範囲を狭めるのが目的か。

因みに、シュレアには俺に対しては全力で来いと言ってある。実戦を模した戦闘訓練だというのに全力を出さないのは意味がない。つまり、殺すつもりでかかってこい、という事だ。

俺は数匹の炎蛇を、電気を纏った剣で薙払い、消滅させていく。

「其は悠久の贄となりて劫墓（きょうぼ）の末席へと誘われよう」

「グレイブブレイザー」

俺を囲うように火の線が走る。咄嗟にその範囲外まで逃れる。範囲を狭め、行動制限をする事で小範囲を当たりやすくする……良い戦い方だな。

「まぁそう簡単には食らわないけどな」

「しッ！」

「うおっと」

避けた所、待ってましたと言わんばかりにシュレアが剣を構えていた。振りかぶられる剣、だが俺の剣には――――

「っていつの間に」

気付いた俺は剣で防がずに、横転して回避、距離を取った。俺の居た場所の地面に振り下ろされた刃。地に生える草は真っ黒に焦げた。シュレアの剣は炎が纏われていた。イグニッションエッジ、武器に炎を纏わせる武装魔法だ。途轍もない突破力を持つそれは、受けた者に致命傷を与える。ディバイディングボルトを纏った剣でも防ぎきれないだろう。

「あっれー、上手く隠してたんだけどなー」

「詠唱中に発動したのか」

「うん、グレイブブレイザーの時にね」

中々使い方が上手くなってきたな、今回はやられた。シュレアが使った戦法は、中級魔法をブラフとして使う。威力の高い一撃に意識を向けさせ、その間に即発動出来る魔法を使い、隙が生じた相手に一撃を与える方法だ。

「中々やるじゃないか」

「でしょ？」

「あぁ、今回はやられた。だから、ちょっとマジメに戦ってやるよ」

「イグニッションエッジ」

雷から炎の武装魔法に上書きし、剣に炎を纏わせる。ここからは完

全なる打ち合い、になるかもな。隙あらば魔法を撃つが。

身体強化し、一気に距離を詰めて薙ぎ払う。

「……！？」

シュレアは咄嗟に防ぐが、力を去なしきれずに剣が弾かれる。俺は左方向に薙ぎ払ったそのまま、更に剣を振るう。

距離があけられ、回避されるが、一歩前に踏み出し、その薙ぎ払う力を利用して剣を左手から右手に持ち替え、更に振るう。

「っ……！」

回避しきれず、剣で防ぐシュレア。今回は警戒していたのか、弾かれる事はないみたいだが、力押しすれば勝てそうだ。

「どうだよ、今のは」

「変則的すぎない……！？」

「相手の裏をかくのが闘い……だろッ！」

「きゃっ！」

腕と足への部分強化を行い、一気に力を込めてシュレアを吹き飛ばした。だが上手く着地したようだ。何度も訓練してきたからだろうか、受け身も上手くなっている。

「はい、しゅーりょー」

「ふー……」

アイリスが手を叩きながら言い、シュレアは息を整えた。打ち合っていた時間は３０分、前なら身体強化しながらであれば軽く出来たが、今回は魔法も加えた変則的な戦闘訓練だ。魔力、体力共に消耗は激しい。

「……リフエルは息一つ乱さないのね」

「慣れてるからじゃないか？」

「そういう問題かしら」

「さてな」

実を言うと、ほんの少しだけ、疲労感はある。だが戦闘に支障を来す程ではないし、我慢すれば誰にもバレないくらいだ。自分でも慣れとかそういう問題じゃないとは思う。だが実際疲れてないのだから仕方がない、体は正直だ。

……転生の賜物、ってか？まぁ、実際どうだかは神のみぞ知るってやつだから、考えたって仕方ないな。

……現在、ルイ湖林に来ている。湖周辺はあまり魔物が出ないので、こうして他者に知られずに訓練が行える。

そういや……。

俺はハーフアンドハーフソードを納刀し、異次元袋から銃、ヴァイ

パーを取り出す。マズルに向けて段々と細くなり、スリムな形で、個人的には好感が持てる。まぁ銃に関してあまり知識がないにわかな俺が一番好きなのはＰ９０、形状的にね。

魔力を腕に通すと、まるで俺の腕そのものとなったかのように、ヴァイパーにも魔力が通う。俺はゲームなどで見た持ち方を見様見真似でやり、木に向けてトリガーを引いた。

小さな音をたてながら銃口から少し白い小さな弾丸が連続して発射され、木を抉っていく。すげぇな……結構ぶっとい木なのに軽く貫通したぞ。

「それが銃……随分、エグいわね」

「確かにな……」

これは想定外の威力だ。木を削る程度だと思っていたのに、まさか貫通するとな。流石に鉄を貫通するとは思えないが……兎に角、取り扱いにはもっと注意しなくちゃいけないな。

ただ、木を貫通した弾丸はいくつかで、その他は木の側面を抉ったり、木にすら当たらないのもあった。距離は４メートル程だが、集弾性はイマイチか？

だが反動が殆ど無いのは有り難い。銃として反動がある方が味があるという思いもあるが、そうなると慣れなきゃいけない。反動を考慮してないせいで銃弾が逸れ、それがこちらのピンチを招く可能性がある。

「ねーねー、その、『ジュウ』って何で出来てるのかな」

「……ん？そういや……なんだこれ」

シュレアの疑問によって、俺も気付いた。質感や重量は鉄の武器のそれと同じ程度。だが魔力との親和性を考えると、未知の物質で出来ているのかもしれない。……ドレイクさんに聞いてみるのも良いかもな、明日向かうわけだし。

「合金だったりしてね」

「合金、か」

「あ、お父さんから聞いた事あるよ！確か色んな鉱石を特殊な方法で混ぜ合わせて出来た物、だよね」

「その通りよ」

へぇ、そんな物があるのか。俺の表情から、知らなかった事を見透かしたのか、えっへんと胸を張るシュレア。うむ、胸もちゃんと成長しげふんげふん。

「そうやって特殊な方法を用いる事で混ぜ合わせた鉱石の長所を組み合わせたり、逆にマイナス点を消したりするのよ。ただ、そういった精錬が出来るのはごく限られた腕利きの鍛冶師くらいって聞いたわ」

腕の良い鍛冶師くらいしか出来ないのか……ん、待てよ。

「なぁ、じゃあさ。紫色のヤツはあるのか？」

「紫色というと、ヴァイオレティアね。あれはかなり高価よ、確か銀やミスリルを使った合金だった筈。硬度、魔力親和性共に非常に高くて武具の素材にするなら申し分ないわね」

ヴァイオレティア、ね……もしかしたら、ドレイクさんの持ってたインゴットはそれなのかもしれない。でも、銀やミスリルを使うとアイリスは言った。どれも鋼以上の代物だ。

「何故ヴァイオレティアを？」

「ちょいと鍛冶屋で紫色のインゴットを見かけたんだ、謎だったのが明らかになって良かった」

新たな謎が生まれたがな。ただ、これ以上を知るには本人に聞くしかないんだろうな。それは遠慮したいし、深追いするべきではないだろう。

「……んじゃ、戻るか」

二人から了承を得、俺達はルフェスへと帰還した。

―――――――――――――――

「あー……」

俺はギルド内のテーブルでぐったりとしていた。もう見てらんないし食いたくもない。胃がヤバい。

何故かというと――――――

『っとここで新人が五皿目に入ったぁ！』

『おおおおおおお！！』

……なんか知らんが大食い大会が開かれていたからだ。カレンさんに出てみない？と言われ、最初は消極的だったのだが賞金の金貨１枚に惹かれてしまい……そして今に至る。

「あー……おえっぷ」

「こら、声出すと吐いちゃうからやめなさい」

因みに隣にはアイリスがおり、俺の背中をさすってくれている。アイリスのおかげで大分腹が落ち着いてきた。さっきまでは思考すら

出来なかったんだ……。

「なーアイリス……この大会ってなんであるんだ……？」

「一種の娯楽よ。ただ単に食べる大会じゃなくて、ほら」

「あー……？」

アイリスの指差す方向は今俺が向いてる方向とは逆。未だ腹がヤバいので、呻きながらそちらに視線を向ける。

そこには沢山の冒険者……だけでなく、町の人達も混ざって何か騒いでいる。

「よし、新人もっとやれ！俺ぁお前に賭けてんだぜ！」

「おぉいザザック、てめぇなんでそんなに食うの遅ぇんだよ！てめぇに賭けた俺はどうすりゃいいんだ！」

あー……賭けやってるのね。

「こういう場所は娯楽が無くて、不定期に大食い大会を開催してるの。毎回料理を提供する店も変わってて、宣伝の意味合いもあるわね。ギルドは大会の開催資金を参加費と賭け金で回収して、料理提供者にも分配、賭けをしてる奴、参加してる奴は楽しめる……こういう事よ」

「ふーん……おぇ」

「あぁ、もう」

「すまん……」

ちらりと大会風景が視界に入り、また吐き気を催し、アイリスが俺の背中をさする。ったくなんであんなに食え……あー、匂いまでしてきた。これは堪える。

「……で、アイリス、賭けたのか」

「えぇ、シュレアに銀貨１０枚」

「……賭け過ぎ、じゃね？」

「まぁ良いじゃない。こういう娯楽なんだし」

まぁ、いいか……。因みに。

『なんと新人！他の選手を差し置いて六皿目に突入だぁ！』

観客の歓声があがる。新人、と呼ばれる大食らいは、実はシュレアである。大会で出される料理が大好物らしく、是非とも参加したいと言ってきたので、参加させてやった。

……実は元から結構な大食らいだ。良く食べ、良く遊び、良く寝るという素晴らしき子供ライフを過ごしてきたからなのか、それとも単純にそういう体質なのかはわからない。

「リフエルは大食いする女の子は好き？」

「……え？うーん……まぁどちらかと言えば小食よりそっちの方が

良いなぁ……」

小食が女の子らしい、と言えなくもないが個人的には良く食べる女の子の方が嬉しい。

「そう」

「……なんだよ」

「いいえ、別に」

何故かにやにやと意味深に笑うアイリス。良くわからんな。

「はいこれ」

「……あ、すみません」

カレンさんが俺の様子を見てか、水を持ってきてくれた。まだ腹も完全には収まっていないので、ちょびちょびと水を飲む。

そのまま俺の対面に座ったカレンさんは、大会の様子に苦笑しつつ、俺に視線を向けた。

「そろそろ決着がつきそうよ」

「やっとですか……」

『終了ー！優勝者は……七皿を平らげた新人、シュレア・コストールちゃんだあああああ！』

『おおおおおお！』

『すげえええ！』

どうやらシュレアが優勝したみたいだ。周囲の観客達から歓声があがる。こんなに盛り上がる大会、なのか。

『優勝者のシュレア・コストールちゃんにはなんと！賞金銀貨２０枚とこちらを贈呈します！』

『なんだあれ……』

『見たことねぇぞ、なんだあの武器』

『かっけぇなぁおい』

ん……？

『こちらはアルビオンで開発された最新の合金、シュヴァルツェアで造られた漆黒の剣、ハール・レクリシアだ！』

シュレアが、ギルド職員から真っ黒な鞘に納まった一本の剣を受け取った。シュレアは多少遠慮しながらも、疼きに耐えられなかったのか、その場で剣を抜き放つ。

刀身も、陽の光さえ吸収してしまうかのように黒く、全体的に装飾はない。が、逆にそれが剣自体の美しさを引き出していた。細身で、かなり振り易そうだ。

『かっけぇぇ！』

『というかあんな嬢ちゃんでも振るえるのかよ……』

『さぁ、それを持った感想は？』

『えっと……凄く振りやすくて、手にしっくりきます』

シュレアの笑顔が見える。どうやらかなり良いみたいだ。

「新素材の、えっと……」

「シュヴァルツェアよ。アルビオンが最近開発したっていう合金。何を混ぜたかは不明だけどねー」

「でもなんでこの町で、しかもこの小規模な大会で賞品になるんですかね」

「うーん……多分宣伝なんじゃない？誰かに使って貰って、それが他の人に知れて」

あぁ、一種の広告塔か。だとしたら頷けなくもないが……だとしたらランクの高い冒険者に渡した方が良いと思う。賞品にすることで皆の競争心を煽る事も出来るけど、あの様子なら公表してなかったみたいだし。

……悔しがらせて、後々買わせる気か？他人の持ってる物を欲しがるタイプの人間は山ほど居るしな。とすると、誰か奪いに来る可能性もあるな……。

———プニ。

「む……！？」

何故か頬を摘まれた。少し驚きながら摘んだ主、アイリスを見る。少し悪戯っ子っぽい、にやついた表情でこちらを見ていた。そして何度も何度もプニプニと触ってくる。

「……あんあよ（なんだよ）？」

「ふふふ……んー？べっつにー。ちょっと触ってみたかっただけよ」

頬を摘んでいた手が離れる。

「仲良いわねー」

「羨ましいかしら」

「っ……！……可愛い子どもの肌を弄ぶなんて羨ま――――けしからん事はしちゃダメよ！」

カレンさん、本音が見え隠れしてますよ、しかも指がワキワキしてるし。隠しきれてない上、偶にこちらをチラッ、チラッと見てくる。

「あら、触り心地は抜群だったわよ？」

「ぐ……」

「プニプニとしたほっぺ、張りと艶があって瑞々しく、その柔らかさと弾力性のバランスが至高だったのに……」

「ぐぬぬ……」

「けしからん、でしょう？残念だわ、私は今後も触るけど」

おい人を玩具にするな、これでも精神年齢は高いんだぞ。恥ずかしくて死ぬかもしれん。今だって触られたドキドキを隠すのに必死なんだからな！

……カレンさんが上目使いにこちらを見てくる！仲間にしま――――あぁ、変な選択肢が見えてしまった。俺は相当慌ててるっぽい。

「……触ります？」

「良いの！？じゃあ……い、いただきます……」

いや、あの、食さないでください。

その後、カレンさんだけでなく、その有り様を見掛けた職員の人達にもプニプニされた俺だった。羞恥心？ははっ、そんな物カレンさんが頬を染めながら遠慮気味にプニプニしてきた時点で耐えきれずに爆死しましたよ、あははは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1687w/

転生した俺の成り上がりストーリー

2011年10月18日00時45分発行